# 資料　太宰治全作品聖書引用一覧

奥村七海

太宰治が生涯にわたって聖書・キリスト教に対する興味、関心を示してきたことは、その発表作や書簡での言及からも明らかである。ここでは、太宰治の全作品においてなされた聖書の引用ならびにキリスト教への言及を挙げるとともに、該当する聖書の本文を引用している。

取り上げる作品については、「太宰治」の筆名で発表されたものに限り、アンケートの回答、「随筆欄」発表作品、『信天翁』収録の「もの思ふ葦」や「慧眼托鉢」などの随筆の傾向が強い作品、『思ひ出』（人文書院・一九四〇年）収録の「余瀝近事片々」収録作品、書簡については除外し、ひとつのまとまりある小説として発表された作品のみに限定した。また、太宰治が使用した聖書は作中の引用から文語訳聖書であろうと考えられるが、蔵書に聖書が遺されておらず、具体的な版が特定されていない。ここでの目的は、あくまで太宰治がどのように聖書の本文を用いたかを確認することであるため、適宜『舊新約聖書　文語訳』（日本聖書協会・一八八七年（二〇一〇年版））を参照し、聖書の本文引用は並行箇所等の資料が最も多く収録されている『聖書　聖書協会共同訳』（日本聖書協会・二〇一八年）を使用している。

**【凡例】**

- 作品本文の引用（①②③……）は『太宰治全集』（全十二巻＋別巻・筑摩書房・一九八九－一九九二年）に拠る。作品名とともに全集収録の巻数を併記し、作品本文には頁数を付記している。
- 聖書本文の引用（(1)(2)(3)……）は日本聖書協会『聖書　聖書協会共同訳―旧約聖書続編付き』（日本聖書協会・二〇一八年）に拠る。聖書本文の引用については、書名あるいは福音書記者名と章・節を明記している。また、既出の聖書本文については引用を省略し、書名あるいは福音書記者名と章・節のみを記した。

・作品本文に対して、複数の聖句が引用されている場合は、作品本文に傍線とアルファベット（ａｂｃ……）を付している。
・引用箇所が具体的に明記されていない場合は、同様の内容を記載したすべての聖書本文を引用している。
・『駈込み訴へ』（『中央公論』第五十五年第二号・一九四〇年）については、『新約聖書』四福音書の翻案小説であることから、四福音書すべての記載を引用するとともに、『旧約聖書』の並行箇所についても引用している。

## ・一九三五年

### 「ダス・ゲマイネ」（『文芸春秋』第十三巻第十号）『太宰治全集第一巻』収録

①クラブ員相互の合言葉――一切誓ふな[a]。幸福とは[b]？　審判する勿れ[c]、ナポリを見てから死ね！　等々。（三一三頁）

a しかし、私は言っておく。一切誓ってはならない。天にかけて誓ってはならない。そこは神の玉座である。地にかけて誓ってはならない。そこは神の足台である。エルサレムにかけて誓ってはならない。そこは偉大な王の都である。また、あなたの頭にかけて誓ってはならない。髪の毛一本すら、あなたは白くも黒くもできないからである。（マタイ5：34－37）

b (1)心の貧しい人々は幸いである／天の国はその人たちのものである。／悲しむ人々は、幸いである／その人たちは慰められる。／へりくだった人々は、幸いである／その人たちは地を受け継ぐ。／義に飢え渇く人々は幸いである／その人たちは満たされる。／憐れみ深い人々は、幸いである／その人たちは憐れみを受ける。／心の清い人々は、幸いである／その人たちは神の子と呼ばれる。／義のために迫害された人々は、幸いである／天の国はその人たちのためのものである。／私のために、人々があなたがたを罵り、迫害し、ありもしないことで悪口を浴びせるとき、あなたがたは幸いである。喜びなさい、大いに喜びなさい。天には大きな報いがある。あなたがたより前の預言者たちも、同じように迫害されたのである。（マタイ5：3－11）

(2)さて、イエスは目を上げ、弟子たちを見て言われた。／「貧しい人々は、幸いである／神の国はあなたがたのものである。／今飢えている人々は、幸いである／あなたがたは満たされる。／今泣いている人々は、幸いである／あなたがたは笑うようになる。／人々があなたがたを憎むとき、また、人の子のためにあなたがたを排斥し、罵り、その名を悪しきものとして捨て去るとき、あなたがたは幸いである。その日には、

喜び踊りなさい。天には大きな報いがある。この人々の先祖も、預言者たちに同じことをしたのである。

（ルカ6：20－22）

c (1)人を裁くな。裁かれないためである。あなたがたは自分の裁く裁きで裁かれ、自分の図る天秤で図られる。

（マタイ7：1－2）

(2)人を裁くな。そうすれば、自分も裁かれない。人を罪に定めるな。そうすれば自分も罪に定められない。赦しなさい。そうすれば、自分も赦される。

（ルカ6：37）

**「地球図」（『新潮』第三十二巻第十二号）『太宰治全集第一巻』収録**

①デウスがハライソを作って無量無数のアンゼルスを置いたこと。から、アダン、エワの出生と堕落[b]について、ノエの箱船のこと[c]。や、モイセスの十誡のこと[d]。さうしてエイズス・キリストの降誕、受難、復活。のてんまつ。シロオテの物語は、尽きるところなかつた。

（八十七頁）

a 神である主は、東の方のエデンに園を設け、形づくった人をそこに置かれた。

（創世記8：9）

b (1)神である主は、エデンの園に人を連れて来て、そこに住まわせた。そこを耕し、守るためであった。

（創世記2：15）

(2)そこで、神である主は人を深い眠りに落とされた。人が眠り込むと、そのあばら骨の一つを取り、そこを肉で閉ざされた。神は人から取ったあばら骨で女を作り上げ、人のところへ連れてこられた。

（創世記2：21－23）

(3)神は女に向かって言われた。／「私はあなたの身ごもりの苦しみを大いに増す。／あなたは苦しんで子を産むことになる。／あなたは夫を求め、夫はあなたを治める。」／神は人に言われた。「あなたは妻の声に聞き従い／取って食べてはいけないと／命じておいた木から食べた。／あなたのゆえに、土は呪われてしまった。／あなたは生涯にわたり／苦しんで食べ物を得ることになる。／土があなたのために生えさせるのは／茨とあざみである。／あなたはその野の草を食べる。／土から取られたあなたは土に帰るまで／額に汗して糧を得る。／あなたは塵だから、塵に帰る。」（創世記3：16－19）

c 神はノアに言われた。「すべての肉なるものの終わりが、私の前に来ている。彼らのゆえに地は暴虐で満ちているからである。今こそ、私は地と共に彼らを滅ぼす。あなたはゴフェルの木で箱舟を作りなさい。箱舟には小部屋を設け、内側にも外側にもタールを塗りなさい。

（創世記6：13－15）

dそれから神は、これらすべての言葉を告げられた。／「私は主、あなたの神、あなたをエジプトの地、奴隷の家から導き出した

者である。あなたには、私をおいてほかに神々があってはならない。あなたは自分のために彫像を造ってはならない。上は天にあるもの、また地の下の水にあるものの、いかなる形も造ってはならない。それにひれ伏し、それに仕えてはならない。私は主、あなたの神、妬む神である。私を憎む者には、父の罪を子に、さらに、三代、四代までも問うが、私を愛し、その戒めを守る者には、幾千代にわたって慈しみを示す。／あなたは、あなたの神、主の名をみだりに唱える者を罰せずにはおかない。／安息日を覚えて、これを聖別しなさい。六日間は働いて、あなたのすべての仕事をしなさい。しかし、七日目はあなたの神、主の安息日であるから、どのような仕事もしてはならない。あなたも、息子も娘も、男女の奴隷も、家畜も、町の中にいるあなたの寄留者も同様である。主は六日のうちに、天と地と海と、そこにあるすべてのものを造り、七日目に休息された。それゆえ、主は安息日を祝福して、これを聖別されたのである。／あなたの父と母を敬いなさい。そうすればあなたは、あなたの神、主が与えてくださった土地で長く生きることが出来る。／殺してはならない。／姦淫してはならない。／盗んではならない。／隣人について偽りの証言をしてはならない。／隣人の家を欲してはならない。隣人の妻、男女の奴隷、牛とろばなど、隣人のものを一切欲してはならない。」（出エジプト記20：1－17）

e 四福音の記述

## ・一九三六年

**『虚構の春』（『文学界』第三巻第七号）『太宰治全集第一巻』収録**

①なんぢら断食するとき、かの偽善者のごとく、悲しき面容をすな。（マタイ六章十六。）キリストだけは、知つてゐた。けれども神の子の苦悩に就いては、パリサイびとでさへ、みとめぬわけにはいかなかつたのである。（四一四頁）

(1)断食するときには、偽善者のように暗い顔つきをしてはならない。（マタイ6：16）

**「狂言の神」（『東陽』第一巻第六号）『太宰治全集第一巻』収録**

①なんぢら断食するとき、かの偽善者のごとく悲しき面容をすな。（マタイ六章十六。）（三六三頁）

(1)（マタイ6：16）

②ひとり牛鍋の葱をつついてゐる男の顔は、笑つてはいけない、キリストそのままであつたといふ。（三七六頁）

**「創生記」（『新潮』第三十三巻第十号）『太宰治全集第二巻』収録**

①知ルヤ、君、断食ノ苦シキトキハ、カノ偽善者ノ如ク悲シキ面容ヲスナ。コレ、神ノ御子ノ言。（六頁）

(1)（マタイ6：16）

②これでもか、これでもか、と豚に真珠の慈雨。あたへる等の事は、右の頬ならば、左の頬をも。、といふかの神の子の言葉の具象化でない。（八頁）

a (1)また、豚の前に真珠を投げてもならない。豚はそれを足で踏みつけ、犬は向き直ってあなたがたを引き裂くであろう。（マタイ7：6）

b (1)しかし、私は言っておく。悪人に手向かってはならない。誰かがあなたの右の頬を打つなら、左の頬をも向けなさい。（マタイ5：39）

(2)あなたの頬を打つ者には、ほかの頬をも向けなさい。上着を奪い取る者には、下着を拒んではならない。（ルカ6：29）

**「喝采」**　**（『若草』第十二巻第十号）『太宰治全集第一巻』収録**

①わが名は、狭き門の番卒、困難の王、（後略）（三五七頁）

(1)狭い門から入りなさい。滅びに至る門は大きく、その道も広い。そして、そこから入る者は多い。（マタイ7：13）

(2)狭い戸口から入るように努めなさい。言っておくが、入ろうとしても入れない人が多いのだ。（ルカ13：24）

## ・一九三七年

**『二十世紀旗手』**　**（『改造』第十九巻第一号）『太宰治全集第二巻』収録**

①謂はば私のゴルゴタ、訳けば髑髏（後略）（五十五頁）

②人の子、その生涯に、三たび、まことに憤怒することあるべし、とモオゼの呟き。（六十五頁）

(1)イスラエルの人々は二人に言った。「私たちはエジプトの地で主の手にかかって死んでいればよかった。あのときは肉の鍋の前に座り、パンを満ち足りるまで食べていたのに、あなたがたは私たちをこの荒れ野に導きだして、この全会衆を死なせようとしています。」／そこで主はモーセに言われた。「今、あなたがたのためにパンを天から降らせる。民は出て行って、毎日、一日分を集めなさい。これは彼らが私の律法に従って歩むかどうか試すためである。六日目に持ち帰ったものを整えると、日ごとに集める分の二倍になるだろう。」／そこでモーセとアロンは、イスラエルの人々すべてに言った。「夕方には、あなたがたは主があなたがたをエジプトの地から導き出されたことを知り、朝には、あなたがたは主の栄光を見る。あなたがたの主に対する不平を主がお聞きになったからだ。あなたがたが並べ立てて不平を言ったのは、私たちに向かってではなく、主に向

かってなのだ。」　（出エジプト記16：3－8）

(2)民はモーセと言い争いになり、「飲み水をください」と言った。モーセは彼らに言った。「なぜあなた方は私と言い争うのか。なぜ主を試すのか。」　（出エジプト記17：2）

(3)宿営に近づくと、子牛の像と踊りが目に入った。そこで、モーセの怒りは燃え、手にしていた板を投げつけ、山のふもとで打ち砕いた。　（出エジプト記32：19）

③人、七度の七十倍ほどだまされてからでなければ、まことの愛の微光をさぐり当て得ぬ。　（七十一頁）

(1)イエスは言われた。「あなたに言っておく。七回どころか七の七十倍まで許しなさい。　（マタイ18：22）

「HUMAN LOST」　（『新潮』第三十四巻四号）

**『太宰治全集第二巻』収録**

①聖書一巻によりて、日本の文学史は、かつてなき程の鮮明さをもて、はつきりと二分されてゐる。マタイ伝二十八章、読み終へるのに、三年かかつた。マルコ、ルカ、ヨハネ、ああ、ヨハネ伝の翼を得るのは、いつの日か。　（三十六－三十七頁）

②十字架のキリスト、天を仰いでゐなかつた。たしかに。地に満つ人の子のむれを、うらめしさうに、見おろしてゐた。　（四十二頁）

③一嚙の歯には、一嚙の歯を。一杯のミルクには、一杯のミルク。（誰のせいでもない。）　（四十五頁）

(1)あなたがたも聞いている通り、『目には目を、歯には歯を』と言われている。　（マタイ5：38）

④「なんぢを訴ふる者とともに途にあるうちに、早く和解せよ。恐くは、訴ふる者なんぢを審判人にわたし、審判人は下役にわたし、遂になんぢは獄に入れられん。／誠に、なんぢに告ぐ。一厘も残りなく償はずば、其処をいづること能はじ。」（マタイ五の二十五、六。）　（四十五頁）

(1)あなたを訴える人と一緒に道を行くときには、途中で早く和解しなさい。さもないと、その人はあなたを裁判官に引き渡し、裁判官は下役に引き渡し、あなたは牢に投げ込まれるに違いない。よく言っておく。最後の一クァドランスを支払うまで、決してそこから出ることはできない。　（マタイ5：25－26）

⑤汝らの仇を愛し、汝らを責むる者のために祈れ。天にいます汝らの父の子とならん為なり。天の父はその陽を悪しき者のうへにも、善き者のうへにも昇らせ、雨を正しき者にも、正しからぬ者にも降らせ給ふなり。なんぢら己を愛すとも何の報をか得べき、取税人も然するにあらずや。兄弟にのみ挨拶すとも何の勝ることかある、異邦人も然するにあらずや。然らば、汝らの

天の父の全きが如く、汝らもまた、全かれ。　（五十頁）

(1)しかし、私は言っておく。敵を愛し、迫害する者のために祈りなさい。天におられるあなた方の父の子となるためである。父は悪人にも善人にも太陽を昇らせ、正しい者にも正しくない者にも雨を降らせてくださるからである。自分を愛してくれる人を愛したところで、あなたがたにどんな報いがあろうか。徴税人でも同じことをしているではないか。あなたがたが自分の兄弟にだけ挨拶したところで、どれだけ優れたことをしたことになろうか。異邦人でも同じことをしているではないか。だから、あなたがたは、天の父が完全であられるように、完全な者となりなさい。　（マタイ5：44－48）

(2)「しかし、あなたがたに言っておく。敵を愛し、あなたがたを憎む者に親切になさい。呪う者を祝福し、侮辱する者のために祈りなさい。あなたの頬を打つ者には、他の頬をも向けなさい。上着を奪い取る者には、下着も拒んではならない。求める者には、誰にでも与えなさい。あなたの持ち物を奪う者から取り戻そうとしてはならない。人にしてもらいたいと思うことを、人にもしなさい。自分を愛してくれる人を愛したところで、あなたがたにどんな恵みがあろうか。罪びとでも、愛してくれる人を愛している。また、自分に良くしてくれる人によくしたところで、どんな恵みがあろうか。罪人でも同じことをしている。返してもらうことを当てにして貸したところで、どんな恵みがあろうか。罪人でも、同じだけのものを返してもらおうとして、罪人に貸すのである。しかし、あなたがたは、敵を愛し、人によくしてやり、何も当てにしないで貸しなさい。そうすれば、たくさんの報いがあり、いと高き方の子となる。いと高き方は、恩を知らない者にも悪人にも、情け深いからである。あなたがたの父が慈しみ深いように、あなたがたも慈しみ深い者となりなさい。」　（ルカ6：27－36）

**「燈籠」**　（『若草』第十三巻第十号）『太宰治全集第二巻』収録

③今夜は、父が、どうもこんなに電燈が暗くては、気が滅入つていけない、と申して、六畳間の電球を、五十燭のあかるい電球へと取りかへました。さうして、親子三人、あかるい電燈の下で、夕食をいただきました。（中略）私たちのしあはせは、所詮こんな、お部屋の電球を変へることくらゐのものなのだ、とこつそり自分に言ひきかせてみましたが、そんなにわびしい気も起らず、かへつてこのつつましい電燈をともした私たち一家が、ずいぶん綺麗な走馬灯のやうな気がして来て、ああ、覗くなら覗け、私たち親子は、美しいのだ、と庭に鳴く虫にまでも知らせてあげたい静かなよろこびが、胸にこみあげて来たので

ございます。　（八十四－八十五頁）

(1)・あなたがたは、世の光である。山の上にある町は、隠れることが出来ない。また、灯をともして升の下に置くものはいない。燭台の上に置く。そうすれば、家にあるものすべてを照らすのである。そのように、あなたがたの光を人々の前に輝かせなさい。人々が、あなたがたの立派な行いを見て、天におられるあなたがたの父を崇めるようになるためである。

（マタイ5：14－16）

・「目は体の灯である。目が澄んでいれば、あなたの全身が明るいが、目が悪ければ、全身も暗い。だから、あなたの中にある光が暗ければ、その暗さはどれほどであろう。」

（マタイ6：22－23）

(2)あなたの目は体の灯である。目が澄んでいれば、あなたの全身も明るいが、目が悪ければ体も暗い。だから、自分の中にある光が暗くならないように気をつけなさい。あなたの全身が明るく、少しも暗い部分がなければ、ちょうど灯が輝いてあなたを照らすときのように、全体が輝くだろう。　（ルカ11：34－36）

・一九三八年

『姥捨』　（『新潮』第三十五巻十号）『太宰治全集第二巻』収録

①ユダの悪が強ければ強いほど、キリストのやさしさの光が増す。　（九十八頁）

・一九三九年

「I can speak」（『若草』第十五巻第二号）『太宰治全集第二巻』収録

①はじめに言葉ありき。よろづのもの、これに拠りて成る。

（二〇〇頁）

(1)初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった。この言は、初めに神と共にあった。万物は言葉によってなった。

（ヨハネ1：1－3）

『女生徒』　（『文学界』第六巻第四号）『太宰治全集第二巻』収録

①キリスト、でも、女のキリストなんてのは、いやらしい。

（二三五頁）

②かうして、じつと見てゐると、ほんたうに、ソロモンの栄華以上だと、実感として、肉体感覚として、首肯される。（二六三頁）

(1)しかし、言っておく。栄華を極めたソロモンでさえ、この花の一つほどにも着飾ってはいなかった。今日は生えていて、明日は炉に投げ込まれる野の草でさえ、神はこのように装ってくだ

さる。まして、あなた方にはなおさらのことではないか。
（マタイ6：29）

(2)野の花がどのように育つのかを考えてみなさい。しかし、言っておく。栄華を極めたソロモンでさえ、この花の一つほどにも着飾ってはいなかった。今日は野にあって、明日は炉に投げ込まれる草でさえ、神はこのように装ってくださる。まして、あなたがたにはなおさらのことである。信仰の薄い者たちよ。
（ルカ12：27－28）

**「懶惰の歌留多」（『文芸』第七巻第四号）『太宰治全集第二巻』収録**

①豚に真珠。
（二七一頁）

(1)（マタイ7：6）

②モオゼがパチンコで雀ねらつてゐるくらゐに、すこぶる珍なものに見えるだらうと、思ふ。
（二七九頁）

③われ、山にむかひて眼を挙ぐ。
（二九〇頁）

(1)都に上る歌。／私は山々に向かって目を上げる。／私の助けはどこから来るのか。
（詩編121：1）

**「秋風記」（『愛と美について』竹村書房・五月）**
**『太宰治全集第二巻』収録**

①「富めるものの天国に入るは――、」
（三〇四頁）

(1)イエスは弟子たちに言われた。「よく言っておく、金持ちが天の国に入るのは難しい。重ねて言うが、金持ちが神の国に入るよりも、らくだが針の穴を通る方がまだ易しい。」
（マタイ19：23－24）

(2)イエスは弟子たちを見回して言われた。「財産のある者が神の国に入るのは、なんと難しいことか。」弟子たちはこの言葉を聞いて驚いた。イエスは重ねて言われた。「子たちよ、神の国に入るのは、なんと難しいことか。金持ちが神の国に入るよりも、らくだが針の穴を通る方がまだ易しい。」
（マルコ10：23－25）

(3)イエスは議員が非常に悩むのを見て、言われた。「財産のある者が神の国に入るのは、なんと難しいことか。金持ちが神の国に入るよりも、らくだが針の穴を通る方がまだ易しい。」
（ルカ18：24－25）

## ・一九四〇年

**『女の決闘』（『月刊文章』第六巻第一号～第六巻第六号）**
**『太宰治全集第三巻』収録**

①おや、聞こえますね。囚人たちの唱歌ですよ。シオンのむすめ、……
（二一六頁）

(1)「シオンの娘に告げよ。／『見よ、あなたの王があなたのとこ

ろに来る。／へりくだって、ロバに乗り／荷を負うろばの子、子ろばに乗って。』」（マタイ21：5）

(2)「シオンの娘よ、恐れるな。／見よ、あなたの王が来る。／ろばの子に乗って。」（ヨハネ12：15）

**「俗天使」（『新潮』第三十七巻第一号）『太宰治全集第三巻』収録**

①傍にミケランジエロの「最後の審判」の大きな写真版をひろげて、そればかりを見つめながら箸を動かしてゐたのであるが、（後略）（八十頁）

**「鷗」（『知性』第三巻第一号）『太宰治全集第三巻』収録**

①いのちは糧にまさり、からだは衣に勝ならずや。空飛ぶ鳥を見よ、播かず、刈らず、倉に収めず。野の百合は如何にして育つかを思へ。労せず、紡がざるなり、されど栄華を極めしソロモンだに、その服装この花のひとつにも如かざりき。けふありて明日、炉に投げ入れられる野の草をも、神はかく装ひ給へば、まして汝らをや。汝ら、之よりも遥かに優るる者ならずや。（一二〇頁）

(1)だから、言っておく。自分の命のことで何を食べようか何を飲もうかと、また体のことで何を着ようかと思い煩うな。命は食べ物よりも大切であり、体は衣服よりも大切ではないか。空の鳥を見なさい。種も蒔かず、刈り入れもせず、倉に納めもしない。だが、あなたがたの天の父は鳥を養ってくださる。まして、あなたがたは鳥よりも優れた者でないか。あなたがたのうちの誰が、思い煩ったからといって、寿命を僅かでも延ばすことができようか。なぜ、衣服のことで思い煩うのか。野の花がどのように育つのか、よく学びなさい。働きもせず、紡ぎもしない。しかし、言っておく。栄華を極めたソロモンでさえ、この花の一つほどにも着飾ってはいなかった。今日は生えていて、明日には炉に投げ込まれる野の草でさえ、神はこのように装ってくださる。まして、あなたがたにはなおさらのことではないか。（マタイ6：25－29）

(2)イエスは弟子たちに言われた。「だから、言っておく。命のことで何を食べようか、体のことで何を着ようかと、思い煩うな。命は食べ物よりも大切であり、体は衣服よりも大切だ。鳥のことを考えてみなさい。種も蒔かず、刈り入れもせず、納屋も倉も持たない。だが、神は鳥を養って下さる。まして、あなたがたは、鳥よりもどれほど優れた者であることか。あなたがたのうちの誰が、思い煩ったからといって、寿命を僅かでも延ばすことが出来ようか。こんな小さなことさえできないのに、なぜ、ほかのことまで思い煩うのか。野の花がどのように育つのか考えてみなさい。働きもせず紡ぎもしない。しかし、言っておく。

栄華を極めたソロモンでさえ、この花の一つほどにも着飾ってはいなかった。今日は野にあって、明日は炉に投げ込まれる草でさえ、神はこのように装ってくださる。まして、あなたがたにはなおさらのことである。（ルカ12：22－27）

②なんぢを訴ふる者と共に途に在るうちに、早く和解せよ。恐らくは、訴ふる者なんぢを審判人にわたし、審判人は下役にわたし、遂になんぢは獄に入れられん。誠に、なんぢに告ぐ。一厘も残りなく償はずば、其処をいづること能はじ。」（マタイ五の二十五、六。）（一二一頁）

(1)（マタイ5：25－26）

『駈込み訴へ』（『中央公論』第五十五年第二号）

『太宰治全集第三巻』収録

①「狐には穴あり、鳥には塒、されども人の子には枕するところなし」それ、それ、それだ。ちやんと白状してゐやがるのだ。（一二六頁）

(1)イエスは言われた。「狐には穴があり、空の鳥には巣がある。だが、人の子には枕する所もない。」（マタイ8：20）

(2)イエスは言われた。「狐には穴があり、空の鳥には巣がある。だが、人の子には枕するところもない。」（ルカ9：58）

②・ペテロに何が出来ますか。ヤコブ、ヨハネ、アンデレ、トマス、痴の集まり、ぞろぞろあの人に附いて歩いて、背筋が寒くなるやうな、甘つたるいお世辞を申し、天国なんて馬鹿げたことを夢中で信じて熱狂し、その天国が近づいたなら、あいつらみんな、右大臣、左大臣にでもなるつもりなのか。（一二六頁）

・やがて天国が近づき、その時こそは、あつぱれ右大臣、左大臣になつてやらうなどと、そんなさもしい根性は持つてゐない。（一二九頁）

(1)その時、ゼベタイの息子たちの母が、その息子たちと一緒にイエスのところに来て、ひれ伏し、願い事をした。イエスが、「何をしてほしいのか」と言われると、彼女は言った。「私の二人の息子が、あなたの御国で、一人はあなたの右に、一人は左に座れるとおっしゃってください。」イエスはお答えになった。「あなたがたは、自分が何を願っているか、わかっていない。私が飲もうとしている杯を飲むことができるか。」（後略）（マタイ20：20－22）

(2)ゼベタイの子ヤコブとヨハネが進み出て、イエスに言った。「先生、お願いすることをかなえていただきたいのですが。」イエスが、「何をしてほしいのか」と言われると、二人は言った。「栄光をお受けになるとき、私どもの一人を右に、もう一人を左に

座らせてください。」イエスは言われた。「あなたがたは、自分が何を願っているのか、分かっていない。この私が飲む杯を飲み、この私が受ける洗礼を受けることが出来るか。」

（マルコ10：35－38）

③五つのパンと魚が二つ在るきりの時でさへ、目前の大群衆みなに食物を与へよ、などと無理難題を言ひつけなさつて、私は陰で実に苦しいやり繰りをして、どうやら、その命じられた食ひものを、まあ、買い調へることが出来るのです。

（一一六－一一七頁）

(1)弟子たちは言った。「ここにはパン五つと魚二匹しかありません。」イエスは、「それをここに持って来なさい」と言い、群衆には草の上に座るようにお命じになった。そして、五つのパンと二匹の魚を取り、天を仰いで祝福し、パンを裂いて弟子たちにお渡しになり、弟子たちはそれを群衆に配った。人々は皆、食べて満腹した。そして、余ったパン切れを集めると、十二の籠いっぱいになった。食べた人は、女と子どもを別にして、男が五千人ほどであった。

（マタイ14：16－21）

(2)イエスは言われた。「パンは幾つあるのか。見て来なさい。」弟子たちは確かめて来て、言った。「五つあります。それに魚が二匹です。」イエスは弟子たちに、皆を組に分けて、青草の上に座らせるようにお命じになった。人々は、百人、五十人ずつまとまって腰を下ろした。イエスは、五つのパンと二匹の魚を取り、天を仰いで祝福し、パンを裂いて、弟子たちに渡しては配らせ、二匹の魚も皆にお分けになった。人々は皆、食べて満腹した。そして、パン切れと魚の残りを集めると、十二の籠にいっぱいになった。パンを食べた人は五千人であった。

（マルコ6：38－44）

(3)しかし、イエスは言われた。「あなたがたの手で食べ物をあげなさい。」彼らは言った。「私たちにはパン五つと魚二匹しかありません。まさか、私たちが、この民みんなのために食べ物を買いに行けとでもいうのでしょうか。」というのは、五千人ほどの人がいたからである。イエスは弟子たちに「人々をおよそ五十人ずつひとまとまりにして座らせなさい」と言われた。弟子たちは、そのようにして皆を座らせた。イエスは五つのパンと二匹の魚を取り、天を仰いで、それを祝福して裂き、弟子たちに渡しては群衆に配らせた。人々は皆、食べて満腹した。そして、余ったパン切れを集めると、十二籠あった。

（ルカ9：13－17）

(4)弟子の一人で、シモン・ペトロの兄弟アンデレが、イエスに言った。「ここに大麦のパン五つと魚二匹とを持っている少年が居

ます。けれども、こんなに大勢の人では、それが何になりましょう。」イエスは、「人々を座らせなさい」と言われた。その場所には草が多かった。それで、人々は座った。その数はおよそ五千人であった。そこで、イエスはパンを取り、感謝の祈りを唱えてから、座っている人々に分け与えられた。また、魚も同じようにして、欲しいだけ分け与えられた。人々が十分食べたとき、イエスは弟子たちに、「少しも無駄にならないように、余ったパン切れを集めなさい」と言われた。集めると、人々が大麦のパン五つを食べて、なお余ったパン切れで十二の籠がいっぱいになった。

（ヨハネ6：8－13）

④一度、あの人が、春の海辺をぶらぶら歩きながら、ふと、私の名を呼び、「おまへにも、お世話になるね。おまへの寂しさは、わかつてゐる。けれども、そんなにいつも不機嫌な顔をしてゐては、いけない。寂しいときに、寂しさうな面容をするのは、それは偽善者のすることなのだ。寂しさを人にわかつて貰はうとして、ことさらに顔色を変へて見せてゐるだけなのだ。まことに神を信じてゐるならば、おまへは、寂しい時でも素知らぬ振りをして顔を綺麗に洗ひ、頭に膏を塗り、微笑んでゐなさるがよい。わからないかね。寂しさを、人にわかつて貰はなくても、どこか眼に見えないところにゐるお前の誠の父だけが、わかつてゐて下さつたなら、それでよいではないか。さうではないかね。寂しさは、誰にだつて在るのだよ。」

（二二七頁）

(1)断食するときには、偽善者のように暗い顔つきをしてはならない。彼等は断食をしているのが人に見えるようにと、顔を隠すしぐさをする。よく言っておく。彼らはその報いをすでに受けている。あなたは、断食するとき、頭に油を塗り、顔を洗いなさい。あなたの断食が人に見られることなく、隠れたところにおられるあなたの父に見ていただくためである。そうすれば、隠れたことを見ておられる父が報いてくださる。

（マタイ6：16－18）

⑤「ペテロやシモンは漁人だ。美しい桃の畠も無い。ヤコブもヨハネも赤貧の漁人だ。あのひとたちには、そんな、一生を安楽に暮らせるような土地が、どこにも無いのだ。」

（二二八頁）

(1)イエスは、ガラリヤ湖のほとりを歩いておられたとき、二人の兄弟、ペトロと呼ばれるシモンとその兄弟アンデレが、湖で網を打っているのを御覧になった。彼らは漁師だった。イエスは、「私に付いて来なさい。人間をとる漁師にしよう」と言われた。二人はすぐに網を捨てて従った。／そこから進んで、別の二人の兄弟、ゼベタイの子ヤコブとその兄弟ヨハネが、父ゼベタイと一緒に、舟の中で網の手入れをしているのを御覧にな

り、二人をお呼びになった。彼らはすぐに、舟と父を残してイエスに従った。

（マタイ4：18－22）

(2)イエスは、ガラリヤ湖のほとりを通っていたとき、シモンとシモンの兄弟アンデレが湖で網を打っているのを御覧になった。彼らは漁師だった。イエスは、「私について来なさい。人間をとる漁師にしよう」と言われた。二人はすぐに網を捨てて従った。また、少し進んで、ゼベタイの子ヤコブとその兄弟ヨハネが、舟の中で網の手入れをしているのを御覧になると、彼らをお呼びになった。この二人も父ゼベタイを雇い人たちと一緒に舟に残して、イエスの後に従いて行った。

（マルコ1：16－20）

(3)これを見たシモン・ペトロは、イエスの膝元にひれ伏して、「主よ、わたしから離れてください。私は罪深い人間です」と言った。とれた魚にシモンも一緒にいた者も皆驚いたからである。シモンの仲間、ゼベタイの子ヤコブもヨハネも同様だった。すると、イエスはシモンに言われた。「恐れることはない。今から後、あなたは人間をとる漁師になる。」そこで彼らは舟を陸に引き上げ、すべてを捨ててイエスに従った。

（ルカ5：8－11）

⑥おのれを高うするものは卑うせられ、おのれを卑うするものは高うせられると、あの人は約束なさつたが、世の中、そんなに甘くいつてたまるものか。

（二二九頁）

(1)「教師」と呼ばれてもいけない。あなたがたの教師はキリスト一人だけである。あなたがたのうちでいちばん偉い人は、仕える者になりなさい。誰でも、高ぶるものは低くされ、へりくだるものは高められる。

（マタイ23：10－12）

(2)招待を受けたら、末席に行って座りなさい。そうすると、あなたを招いた人たちが来て、「友よ、もっと上席にお進みください」と言うだろう。その時、同席の人みんなの前で面目を施すことになる。／誰でも、高ぶるものは低くされ、へりくだるものは高められる。

（ルカ14：10－11）

(3)人間の高ぶりはその者を低くし／心の低い人は誉れを受ける。

（箴言29：13）

⑦あの村のマルタ奴の妹マリヤが、ナルドの香油を一ぱい満たして在る石膏の壺をかかへて饗宴の室にこつそり這入つて来て、だしぬけに、その油をその人の頭にざぶと注いで御足まで濡らしてしまつて、それでも、その失礼を詫びるどころか、落ち着いてしやがみ、マリヤ自身の髪の毛であの人の濡れた両足を丁寧に拭つてあげて、香油の匂ひが室に立ちこもり、誠に異様な光景でしたので、私は、なんだか無性に腹が立つて来て、失礼

なことをするな！　と、その妹娘に怒鳴つてやりました。これ、このやうに置物が濡れてしまつたではないか、それに、こんな高価な油をぶちまけてしまつてもつたいないとは思はないか、なんといふお前は馬鹿な奴だ。これだけの油だつたら、三百デナリもするではないか、この油を売つて三百デナリ儲けて、その金をば貧乏人に施してやつたら、どんなに貧乏人が喜ぶか知れない。無駄なことをしては困るね、と私は、さんざ叱つてやりました、すると、あの人は、私のはうを屹つと見て、「この女を叱つてはいけない。この女のひとは、大変いいことをしてくれたのだ。貧しい人にお金を施すのは、おまへたちには、これからあとあと、いくらでも出来ることではないか。私には、もう施しが出来なくなつているのだ。そのわけは言ふまい。この女のひとだけは知つてゐる。この女が私のからだに香油を注いだのは、私の葬ひの備へをしてくれたのだ。おまへたちも覚えて置くがよい。全世界、どこの土地でも、私の短い一生を言い伝へられる処には、必ず、この女の今日の仕草も記念として語り伝へられるであらう。」

（一三〇頁）

(1)さて、イエスがベタニアで、既定の病を患っているシモンの家におられたとき、一人の女が、極めて高価な香油の入った石膏の壺を持って近寄り、食事の席に着いておられるイエスの頭に香油を注ぎかけた。弟子たちはこれを見て、憤慨して言った。「何のために、こんな無駄遣いをするのか。高く売って、貧しい人々に施すことが出来たのに」イエスはこれに気づいて言われた。「なぜ、この人を困らせるのか。私に良いことをしてくれたのだ。貧しい人々はいつもあなたがたと一緒にいるが、私はいつも一緒にいるわけではない。この人はわたしの身体に香油を注いで、私を葬る準備をしてくれた。よく言っておく。世界中どこでも、この福音が宣べ伝えられる所では、この人のしたことも記念として語り伝えられるであろう。

（マタイ26：6－13）

(2)イエスがベタニアで、既定の病を患っているシモンの家にいて、食事の席に着いておられたとき、一人の女が、純粋で非常に高価なナルドの香油の入った石膏の壺を持って来て、その壺を壊し、香油をイエスの頭に注ぎかけた。すると、ある人々が憤慨して互いに言った。「何のために香油をこんなに無駄にするのか。この香油は三百デナリオン以上に売って、貧しい人に施すことができたのに。」そして、彼女を厳しくとがめた。イエスは言われた。「するままにさせておきなさい。なぜ、この人を困らせるのか。私に良い事をしてくれたのだ。貧しい人々はいつもあなた方と一緒にいるから、したいときには良いこと

をしてやれる。しかし、私はいつも一緒にいるわけではない。この人はできるかぎりのことをした。つまり、前もってわたしの身体に香油を注ぎ、埋葬の準備をしてくれた。よく言っておく。世界中どこでも、福音が宣べ伝えられる所では、この人のしたことも、記念として語り伝えられるであろう。」

（マルコ14：3－9）

(3)さて、あるファリサイ派の人が、一緒に食事をしたいと願ったので、イエスはその家に入って食事の席に着かれた。この町に一人の罪深い女がいた。イエスがファリサイ派の人の家で食事の席についておられるのを知り、香油の入った石膏の壺を持って来て、背後に立ち、イエスの足元で泣きながらその足を涙で濡らし始め、自分の髪の毛で拭い、その足に接吻して香油を塗った。イエスを招待したファリサイ派の人はこれを見て、「この人がもし預言者なら、自分に触れている女が誰で、どんな素性の者か分かるはずだ、罪深い女なのに。」と思った。そこで、イエスはその人に向かって、「シモン、あなたに言いたいことがある」と言われた。シモンは「先生、お話ください」と言った。（中略）そして、女の方を振り向いて、シモンに言われた。「この人を見ないか。私があなたの家に入ったとき、あなたは足を洗う水もくれなかったが、この人は涙で足をぬらし、髪の毛で拭ってくれた。あなたは私に接吻してくれなかったが、この人は私が入ったときから、私の足に接吻してやまなかった。あなたは頭に香油を塗ってくれなかったが、この人は足に香油を塗ってくれた。だから、言っておく。この人が多くの罪を赦されたことは、私に示した愛の大きさでわかる。赦される事の少ないものは、愛することも少ない。」そして、イエスは女に、「あなたの罪は赦された」と言われた。

（ルカ7：36－48）

(4)過越祭の六日前に、イエスはベタニアに行かれた。そこには、イエスが死者の中からよみがえらせたラザロがいた。イエスのためにそこで夕食が用意され、マルタは給仕をしていた。ラザロは、イエスと共に食事の席に着いた人々の中にいた。その時、マリアが純粋で非常に高価なナルドの香油を一リトラ持って来て、イエスの足に塗り、自分の髪でその足を拭った。家は香油の香りでいっぱいになった。／弟子の一人で、イエスを裏切ろうとしていたイスカリオテのユダが言った。「なぜ、この香油を三百デナリオンで売って、貧しい人々に施さなかったのか。」／彼がこう言ったのは、貧しい人々のことを心にかけていたからではない。自分が盗人であり、金入れを預かっていて、その中身をごまかしていたからである。イエスは言われた。「こ

の人のするままにさせておきなさい。私の埋葬の日のために、それを取って置いたのだ。貧しい人々はいつもあなたがたと一緒にいるが、私はいつも一緒にいるわけではない。」

（ヨハネ12：1－8）

⑧マルタの妹のマリヤは、姉のマルタが骨組頑丈で牛のやうに大きく、気象も荒く、どたばた立ち働くのだけが取柄で、なんの見どころも無い百姓女でありますが、あれは違つて骨も細く、皮膚は透きとほる程の青白さっで、手足もふつくらして小さく、湖水のやうに深く澄んだ大きな眼が、いつも夢みるやうに、うつとり遠くを眺めてゐて、あの村では皆、不思議がっているほどの気高い娘でありました。

（一三二頁）

(1)さて、一行が旅を続けているうちに、イエスはある村に入られた。すると、マルタという女が、イエスを家に迎え入れた。彼女にはマリアという妹がいた。マリアは主の足元に座って、その話を聞いていた。／マルタは、いろいろともてなしのために忙しくしていたが、そばに立って言った。「主よ、妹は私だけにおもてなしをさせていますが、何ともお思いになりませんか。手伝ってくれるようにおっしゃってください。」主はお答えになった。「マルタ、マルタ、あなたはいろいろなことに気を遣い、思い煩っている。／しかし、必要なことは一つだけである。マリアは良いほうを選んだ。それを取り上げてはならない。」

（ルカ10：38－42）

(2)イエスのためにそこで夕食が用意され、マルタは給仕をしていた。

（ヨハネ12：2）

⑨そのあくる日、私たちは愈々あこがれのエルサレムに向ひ、出発いたしました。（中略）やがて、エルサレムの宮が間近になつたころ、あの人は、一匹の老いぼれた驢馬を道ばたで見つけて、微笑してそれにうち乗り、これこそは、「シオンの娘よ、懼るな、視よ、なんじの王は驢馬の子に乗りて来り給ふ」と予言されてある通りの形なのだと、弟子たちに晴れがましい顔をして教へましたが、私一人はなんだか浮かぬ気持ちでありました。

（一三三頁）

(1)（前略）イエスは二人の弟子を使いに出そうとして、言われた。「向こうの村へ行きなさい。するとすぐ、ろばがつないであり、一緒に子ろばのいるのが見つかる。それをほどいて、私のところに引いて来なさい。もし、誰かが何か言ったら、『主がお入り用なのです』と言いなさい。すぐ渡してくれる。」それは預言者を通して言われたことが実現するためであった。／「シオンの娘に告げよ。『見よ、お前の王がお前のところに来る。／へりくだって、ろばに乗り、／荷を負うろばの子、子ろばに乗っ

て。』／弟子たちは行って、イエスが命じられたとおりにし、ろばと子ろばを引いてきて、その上に上着を掛けると、イエスはそれにお乗りになった。（マタイ21：2－7）

(2)（前略）イエスは二人の弟子を使いに出そうとして、言われた。「向こうの村へ行きなさい。村に入るとすぐ、まだだれも乗ったことのない子ろばのつないであるのが見つかる。それをほどいて、連れて来なさい。もし、誰かが、『なぜ、そんなことをするのか』と言ったら、『主がお入り用なのです。すぐここにお返しになります』と言いなさい。」二人は、出かけていくと、表通りの戸口に子ろばが繋いであるのを見つけたので、それをほどいた。すると、そこに居合わせた人々が「その子ろばをほどいてどうするのか」と言った。二人が、イエスの言われた通り話すと、許してくれた。二人がろばをイエスのところに連れて来て、その上に自分の上着を掛けると、イエスはそれにお乗りになった。（マルコ11：1－7）

(3)（前略）二人の弟子を使いに出そうとして、言われた。「向こうの村へ行きなさい。村に入ると、まだ誰も乗ったことのない子ろばのつないであるのが見つかる。それをほどいて、引いて来なさい。もし、誰かが、『なぜほどくのか』と言ったら、『主がお入り用なのです』と言いなさい。」使いに出された者たちが出かけて行くと、言われた通りであった。子ろばをほどいていると、その持ち主たちが「なぜ、子ろばをほどくのか」と言った。二人は、「主がお入り用なのです」と言った。そして、子ろばをイエスのところに引いてきて、その上に自分の上着を掛け、イエスをお乗せした。（ルカ19：29－35）

(4)イエスは子ろばを見つけて、お乗りになった。次のように書いてあるとおりである。／「シオンの娘よ、恐れるな／見よ、あなたの王が来る。／ろばの子に乗って。」／弟子たちは最初これらのことが分からなかったが、イエスが栄光を受けられたとき、それがイエスについて書かれたものであり、人々はそのとおりにイエスにしたということを思い出した。（ヨハネ12：14－16）

(5)娘シオンよ、大いに喜べ。／娘エルサレムよ、喜び叫べ。／あなたの王があなたのところに来る。／彼は正しき者であって、勝利を得る者。／へりくだって、ろばに乗ってくる／雌ろばの子、子ろばに乗って。（ゼカリヤ書9：9）

⑩（前略）群衆は刻一刻とその数を増し、あの人の通る道々に、赤、青、黄、色とりどりの彼等の着物をほうり投げ、あるいは棕櫚の枝を伐って、その行く道に敷きつめてあげて、歓呼にどよめき迎えるのでした。（中略）「ダビデの子にホサナ、讃むべ

きかな、主の御名によりて来るもの、いと高き処にて、ホサナ。」と熱狂して口々に歌ふのでした。　（一三三－一三四頁）

(1)大勢の群衆が自分の上着を道に敷き、また、ほかの人々は木の枝を切って道に敷いた。そして群衆は、前を行く者も後に従う者も叫んだ。／「ダビデの子にホサナ。／主の名によって来られる方に／祝福があるように。／いと高きところにホサナ。」

（マタイ21：8－9）

(2)多くの人が自分の上着を道に敷き、また、ほかの人々は野原から葉の付いた枝を切って来て敷いた。そして前を行く者も後に従う者も叫んだ。／「ホサナ。／主の名によって来られる方に、／祝福があるように。／我らの父ダビデの来るべき国に、／祝福があるように。／いと高きところにホサナ。」

（マルコ11：8－10）

(3)イエスが進んでいかれると、人々は自分の上着を道に敷いた。／いよいよオリーブの山の坂にさしかかられたとき、弟子の群れは皆喜んで、自分の見たあらゆる御力のことで、声高らかに神を賛美し始めた。／「主の名によって来られる王に、／祝福があるように。／天には平和、／いと高きところには栄光があるように。」

（ルカ19：36－38）

(4)その翌日、祭に来ていた大勢の群衆は、イエスがエルサレムに来られると聞き、なつめやしの枝を持って迎えに出た。そして、叫び続けた。「ホサナ。／主の名によって来られる方に、祝福があるように、イスラエルの王に。」　（ヨハネ12：12－13）

(5)彼らは、「でたらめを言うな。さあ、話してくれ」と言った。そこでイエフは答えた。「あの男は私にこんなことを言ったのだ。『主はこう言われる。私はあなたに油を注ぎ、イスラエルの王とする。』」すると彼らはおのおの急いで自分の上着を脱ぎ、階段の下にいたイエフの足元に敷いた。（列王記下9：12－13）

(6)祝福あれ、主の名によって来る人に。／私たちは主の家からあなたがたを祝福する。／主こそ神、主が私たちを照らす。／祭壇の角のところまで／枝を手に祭の行列を組め。／あなたは私の神。あなたに感謝します。わが神よ、あなたを崇めます。

（詩編118：26－28）

⑪かくしてあの人は宮に入り、驢馬から降りて、何を思つたか、縄を拾ひ之を振りまはし、宮の境内の、両替する者の台やら、鳩売る者の腰掛けやらを打ち倒し、また売り物に出てゐる牛、羊をも、その縄の鞭でもつて全部、宮から追ひ出して、境内にゐる大勢の商人たちに向かひ、「おまへたち、みな出て失せろ、私の父の家を、商いの家にしてはならぬ」と甲高い声で怒鳴るのでした。あの優しいお方が、こんな酔つ払いのやうな、つま

らぬ乱暴を働くとは、どうしてもすこし気がふれてゐるとしか、私には思はれませんでした。（中略）「おまえたち、この宮をこはしてしまへ、私は三日の間に、また立て直してあげるから」といふことだつたので、さすが愚直の弟子たちも、あまりに無鉄砲なその言葉には、信じかねて、ポカンとしてしまひました。

（一三四頁）

(1)それから、イエスは神殿の境内に入り、そこで売り買いをしていた人々を皆追い出し、両替人の台や鳩を売る者の腰掛けを覆された。そして言われた。／「こう書いてある。／『私の家は、祈りの家と呼ばれる。』／ところが、あなたがたは、／それを強盗の巣にしている。」

（マタイ21：12－13）

(2)それから、一行はエルサレムに来た。イエスは神殿の境内に入り、そこで売り買いしていた人々を皆追い出し始め、両替人の台や鳩を売る者の腰掛けを覆された。また、境内を通って物を運ぶこともお許しにならなかった。そして、人々に教えて言われた。「こう書いてあるではないか。／『わたしの家は、すべての民の／祈りの家と呼ばれる。』ところが、あなたがたは／それを強盗の巣にしてしまった。」

（マルコ11：15－17）

(3)それから、イエスは神殿の境内に入り、そこで商売をしていた人々を追い出し始め、彼らに言われた。「こう書いてある。／『わたしの家は、祈りの家となる。』／ところが、あなたがたは、それを強盗の巣にした。」

（ルカ19：45－46）

(4)ユダヤ人の過越祭が近づいたので、イエスはエルサレムへ上って行かれた。そして神殿の境内で牛や羊や鳩を売る者たちと、両替人たちが座っているのを御覧になった。イエスは縄で鞭を作り、羊や牛をすべて境内から追い出し、両替人の金をまき散らし、その台を倒し、鳩を売る者たちに言われた。「それをここから持って行け。私の父の家を商売の家としてはならない。」弟子たちは、「あなたの家を思う熱情がわたしを食い尽くす」と書いてあるのを思い出した。ユダヤ人はイエスに、「こんなことをするからには、どんなしるしをわたしたちに見せるつもりか」と言った。イエスは答えて言われた。「この神殿を壊してみよ。三日で建て直して見せる。」それでユダヤ人たちは、「この神殿は建てるのに四十六年もかかったのに、三日で建て直すと言うのか」と言った。イエスはご自分の体である神殿のことを言われたのである。

（ヨハネ2：13－21）

(5)あなたの家を思う熱情が私を食い尽くし／あなたをそしる者のそしりが／私の上に降りかかっています。

（詩編69：10）

(6)私は彼らを私の聖なる山に導き／私の祈りの家で喜ばせよう。／彼らの焼き尽くすいけにえと会食のいけにえは／私の祭壇の

上で受け入れられる。／私の家は凡ての民の祈りの家と呼ばれる。／イスラエルの追い散らされた者たちを／集められる主なる神の仰せ――／私はさらに人々を集め／すでに集められた者たちに加えよう。（イザヤ書56：7－8）

⑫「禍害なるかな、偽善なる学者、パリサイ人よ。汝らは盃と皿の外を潔くす、然れども内は貪欲と放縦とにて満つるなり[a]。禍害なるかな、偽善なる学者、パリサイ人よ、汝らは白く塗りたる墓に似たり。外は美しく見ゆれども、内は死人の骨とさまざまの穢れとに満つ。斯のごとく汝らも外は正しく見ゆれども、内は偽善と不法とにて満るなり[b]。蛇よ、蝮の裔よ、なんぢら争で、ゲヘナの刑罰を避け得んや[c]。（後略）（一三五頁）

a (1)律法学者たちとファリサイ派の人々、あなたがた偽善者に災いあれ。あなたがたは、杯や皿の外側は清めるが、内側は強欲と放縦で満ちている。（マタイ23：25）

(2)主は言われた。「なるほど、あなたがたファリサイ派の人々は、杯や大皿の外側は清めるが、自分の内側は強欲と悪意で満ちている。愚かな者たち、外側を造られた方は、内側もお造りになったのではないか。（ルカ11：39）

b (1)律法学者たちとファリサイ派の人々、あなたがた偽善者に災いあれ。あなたがたは白く塗った墓に似ているからだ。外側は美しく見えるが、内側は死者の骨やあらゆる汚れで満ちている。このようにあなたがたも、外側は人に正しいと見えても、内側は偽善と不法とでいっぱいである。（マタイ23：27－28）

(2)あなたがたに災いあれ。あなたがたは、人目につかない墓のようなものである。その上を歩く人は気づかない。（ルカ11：44）

c (1)蛇よ、毒蛇の子らよ、どうしてあなたがたはゲヘナの裁きを免れることが出来ようか。（マタイ23：33）

⑬（前略）ああエルサレム、エルサレム、予言者たちを殺し、遣されたる人々を石にて撃つ者よ、牝鶏のその雛を翼の下に集むるごとく、我なんぢの子らを集めんと為しこと幾度ぞや、然れど、汝らは好まざりき。」（一三五頁）

(1)エルサレム、エルサレム、預言者たちを殺し、自分に遣わされた人々を石で打ち殺す者よ。めんどりが雛を羽の下に集めるように、私はお前の子らを何度集めようとしたことか。だが、お前たちは応じようとしなかった。（マタイ23：37）

(2)エルサレム、エルサレム、預言者たちを殺し、自分に遣わされた人々を石で打ち殺す者よ、めんどりが雛を羽の下に集めるように、私はお前の子らを何度集めようとしたことか。だが、お

前たちは応じようとしなかった。　（ルカ13：34）

⑭飢饉があるの、地震が起こるのa、星は空より堕ち、月は光を放たずb、地に満つ人の死骸のまはりに、それをついばむ鷲が集まるのc、人はその時哀哭、歯噛みをすることがあらうだの、実に、とんでもない暴言を口から出まかせに言ひ放つたのです。　（一三五頁）

a (1)民族は民族に敵対して立ち上がり、方々に飢饉や地震が起こる。　（マタイ24：7）

(2)民族は民族に、国は国に敵対して立ち上がり、方々に地震があり、飢饉が起こる。　（マルコ13：8）

(3)民族は民族に、国は国に敵対して立ち上がる。大地震があり、方々に飢饉や疫病が起こり、恐ろしい現象や天から大きな徴が現れる。　（ルカ21：10－11）

(4)その頃は、出て行く者にも入って来る者にも平安はなく、すべての地の住民は甚だしい騒乱に巻き込まれていた。国は国に、町は町に打ち砕かれた。神があらゆる苦しみで彼等をかき乱したからだ。　（歴代誌下15：5－6）

b (1)それらの日に起こる苦難の後、たちまち／太陽は暗くなり／月は光を放たず／星は天から落ち／天の諸力は揺り動かされる。　（マタイ24：29）

(2)それらの日には、このような苦難の後／太陽は暗くなり／月は光を放たず／星は天から落ち／天の諸力は揺り動かされる。　（マルコ13：24－25）

(3)そして、太陽と月と星に徴が現れる。地上では海がどよめき荒れ狂う中で、諸国の民はおそれおののく。（中略）天の諸力が揺り動かされるからである。　（ヨハネ21：25－26）

c (1)屍のある所には、禿鷲が集まるものだ。　（マタイ24：28）

⑮祭司長や民の長老たちが、大祭司カヤパの中庭にこつそり集つて、あの人を殺すことを決議したとか、私はそれを、きのふ町の物売りから聞きました。もし群衆の目前であの人を捕へたならば、あるいは群衆が暴動を起こすかも知れないから、あの人と弟子たちとだけの居るところを見つけて役所に知らせてくれた者には銀三十を与へるということをも、耳にしました。　（一三六頁）

(1)その時、十二人の一人で、イスカリオテのユダと言う者が、祭司長たちのところへ行き、「あの男をあなたがたに引き渡せば、幾らくれますか」と言った。そこで、彼らは銀貨三十枚を支払った。その時から、ユダはイエスを引き渡そうと、機会をうかがっていた。　（マタイ26：14－16）

(2)さて、過越祭と除酵祭の二日前になった。祭司長たちや律法学

者たちは、どのようにイエスをだまして捕らえ、殺そうかと謀っていた。彼らは、「祭りの間はやめておこう。民衆が騒ぎ出すといけない」と話していた。（マルコ14：1－2）

(3)さて、過越祭と言われる除酵祭が近づいていた。祭司長たちや律法学者たちは、どのようにしてイエスを殺そうかと謀っていた。彼らは民衆を恐れていたのである。その時、十二人に数えられる一人で、イスカリオテと呼ばれるユダの中に、サタンが入った。ユダは祭司長たちや神殿の管理者たちのもとに行き、どのようにしてイエスを引き渡そうかと相談した。彼等は喜び、ユダに金を与えることに決めた。ユダは承諾して、群衆のいないときにイエスを引き渡そうと、機会を狙っていた。（ルカ22：1－6）

(4)そこで、祭司長とファリサイ派の人々は最高法院を召集して言った。「この男は多くのしるしを行っているが、どうすればよいか。このままにしておけば、皆が彼を信じるようになる。そして、ローマ人が来て、我々の土地も国民も奪ってしまうだろう。」彼等の中の一人で、その年の大祭司であったカイアファが言った。「あなたがたは何も分かっていない。一人の人が民の代わりに死に、国民全体が滅びないで済むほうが、あなたがたに好都合だとは考えないのか。」これは、カイアファが自分から言ったのではない。その年の大祭司であったので預言をして、イエスが国民のために死ぬ、と言ったのである。国民のためばかりでなく、散らされている神の子たちを一つに集めるためにも死ぬ、と言ったのである。この日から、彼らはイエスを殺そうとたくらんだ。／（中略）人々はイエスを探し、神殿の境内に立って互いに言った。「どう思うか。あの人はこの祭りには来ないのだろうか。」祭司長たちとファリサイ派の人々は、イエスの居所が分かれば届け出よと、命令を出していた。イエスを逮捕するためである。（ヨハネ11：47－57）

(5)私は「好意」という私の杖を取って折り、私がすべての民と結んだわが契約を破棄した。その日、それは無効にされた。私を見守っていた羊の商人は、それが主の言葉であることを知った。私は彼らに言った。「もし、あなたがよいと思うなら、私に賃金を支払え。そうでなければ、払わなくてもよい。」彼らは私の賃金として銀三十シェケルを支払った。主は私に言われた。「私が彼らによって値踏みされた尊い価を、陶工に投げ与えよ。」そこで私は、銀三十シェケルを取り、それを主の神殿で陶工に投げ与えた。（ゼカリヤ書11：10－13）

⑯あの人は卓の上の水甕を手にとり、その水甕の水を、部屋の隅に在つた小さい盥に注ぎ入れ、それから純白の手巾をご自身の

腰にまとひ、盥の水で弟子たちの足を順々に洗つてくださつたのであります。（中略）ペテロは、あのやうに愚かな正直ものでありますから、不審の気持を隠して置くことが出来ず、主よ、あなたはどうして私の足などお洗ひになるのです、と多少不満げに口を尖らして尋ねました。あの人は、「ああ、私のすることは、おまへには、わかるまい。あとで、思ひ当たることもあるだらう。」と穏やかに言ひさとし、ペテロの足元にしやがんだのだが、ペテロは尚も頑強にそれを拒んで、（中略）その足をひつこめて言い張りました。すると、あの人は少し声を張り上げて、「私がもし、おまへの足を洗はないのなら、おまへと私とは、もう何の関係もないことになるのだ。」（中略）あの人も少し笑ひながら、ペテロよ、足だけ洗へば、もうそれで、おまへの全身は潔いのだ。ああ、おまへだけでなく、ヤコブも、ヨハネも、みんな汚れのない、潔いからだになつたのだ。けれども、」（中略）「みんなが潔ければいいのだが。」

（一三六－一三七頁）

(1)過越祭の前に、イエスは、この世から父のもとへ移るご自分の時が来たことを悟り、世にいるご自分の者たちを愛して、最後まで愛し抜かれた。夕食のときであった。既に悪魔は、シモンの子イスカリオテのユダに、イエスを裏切る思いを入れていた。イエスは、父がすべてをご自分の手にゆだねられたこと、また、ご自分が神のもとから来て、神のもとに帰ろうとしていることを悟り、夕食の席から立ち上がって上着を脱ぎ、手ぬぐいを取って腰にまとわれた。それから、たらいに水をくんで弟子たちの足を洗い、腰にまとった手ぬぐいで拭き始められた。シモン・ペトロのところに来られると、ペトロは、「主よ、あなたが私の足を洗ってくださるのですか」と言った。イエスは答えて、「私のしていることは、今あなたにはわからないが、後で、分かるようになる」と言われた。ペトロが、「私の足など、決して洗わないでください」と言うと、イエスは、「もし私があなたを洗わないなら、あなたは私と何の関わりもなくなる」とお答えになった。シモン・ペトロは言った。「主よ、足だけでなく、手も頭も。」イエスは言われた。「すでに身体を洗った者は、全身清いのだから、足だけ洗えばよい。あなたがたは清いのだが、皆が清いわけでは無い。」

（ヨハネ13：1－10）

⑰「おまへたちのうちの一人が、私を売る。」「私がいま、その人に一つまみのパンを与へます。その人は、ずいぶん不仕合せな男なのです。ほんたうに、その人は、生まれて来なかつたはうが、よかつた。」と意外にはつきりした語調で言つて、一つまみのパンをとり腕をのばし、あやまたず私の口にひたと押し当

てました。私も、もうすでに度胸がついてゐたのだ。（中略）旦那さま、あいつは私に、おまへの為すことを速かに為せと言ひました。

（一三八頁）

(1)一同が食事をしているとき、イエスは言われた。「よく言っておく。あなたがたのうちの一人が、私を裏切ろうとしている。」弟子たちは非常に心を痛めて、「主よ、まさか私のことでは」と代わる代わる言い始めた。イエスはお答えになった。「私と一緒に手で鉢に食べ物を浸した者が、私を裏切る。人の子は、聖書に書いてあるとおりに、去っていく。だが、人の子を裏切る者に災いあれ。生まれなかった方が、その者のためによかった。」イエスを裏切ろうとしていたユダが、「先生、まさか私のことでは」と言うと、イエスは言われた。「それはあなたの言ったことだ。」

（マタイ26：21－25）

(2)一同が席に着いて食事をしているとき、イエスは言われた。「よく言っておく。あなたがたのうちの一人で、わたしと一緒に食事をしている者が、私を裏切ろうとしている。」弟子たちは心を痛めて、「まさかわたしのことでは」と代わる代わる言い始めた。イエスは言われた。「十二人のうちの一人で、わたしと一緒に鉢に食べ物を浸している者がだ。人の子は、聖書に書いてあるとおりに、去っていく。だが、人の子を裏切る者に災いあれ。生まれなかったほうが、その者のためによかった。」

（マルコ14：18－21）

(3)それから、イエスはパンを取り、感謝の祈りを献げてそれを裂き、使徒たちに与えて言われた。「これは、あなたがたのために与えられるわたしの体である。私の記念として、このように行いなさい。」食事の後、杯も同じようにして言われた。「この杯は、あなたがたの為に流される。私の血による新しい契約である。しかし、見よ、わたしを裏切る者が、わたしと一緒に手を食卓に置いている。人の子は、定められたとおり去っていく。だが、人の子を裏切るものに災いあれ。」そこで使徒たちは、自分たちのうち、一体誰がそんなことをしようとしているのかと互いに議論をし始めた。

（ルカ22：19－23）

(4)イエスはこう話し終えると、心を騒がせ、証して言われた。「よくよく言っておく。あなたがたのうちの一人がわたしを裏切ろうとしている。」弟子たちは、誰のことを言われたのか察しかねて、顔を見合わせた。イエスのすぐ隣には、弟子の一人で、イエスの愛しておられた者が食事の席に着いていた。シモン・ペトロはこの弟子に、誰について言っておられるのかと尋ねるように合図した。その弟子が、イエスの胸もとに寄りかかったまま、「主よ、誰のことですか」と言うと、イエスは「わたしが

パン切れを浸して与えるのがその人だ」とお答えになった。それから、パン切れを浸して取り、シモンの子イスカリオテのユダに、お与えになった。ユダがパン切れを受けるやいなや、サタンが彼の中に入った。イエスは、「しようとしていることを、今すぐするがよい」と言われた。座に着いていた者は誰も、なぜユダにこう言われたのか分からなかった。ある者は、ユダが金入れを預かっていたので、「祭りに必要なものを買いなさい」とか、貧しい人に何か施すようにと、イエスが言われたのだと思っていた。ユダはパン切れを受け取ると、すぐに出て行った。夜であった。

（ヨハネ13：21－30）

(5)私が信頼していた友さえも／私のパンを食べながら／威張って私を足蹴にします。

（詩編41：10）

⑱あの人はいま、ケデロンの小川の彼方、ゲツセマネの園にゐます。もうはや、あの二階座敷の夕餐もすみ、弟子たちとともにゲツセマネの園に行き、いまごろは、きつと天へお祈りを捧げてゐる時刻です。弟子たちのほかには、誰も居りません。今なら難なくあの人を捕へることが出来ます。

（一四〇頁）

(1)それから、イエスは弟子たちと一緒にゲツセマネという所に来て、「私が向こうへ行って祈っている間、ここに座っていなさい」と言われた。ペトロとゼベタイの子二人とを伴われたが、苦しみ悩み始められた。（中略）少し先に進んでうつ伏せになり、祈って言われた。（中略）それから、弟子たちのところに戻って来て言われた。「まだ眠っているのか。休んでいるのか。時が近づいた。人の子は罪人たちの手に渡される。立て、行こう。見よ、私を裏切るものが近づいてきた。」

（マタイ26：36－46）

(2)一同がゲツセマネという所に来ると、イエスは弟子たちに、「私が祈っている間、ここに座っていなさい」と言われた。そして、ペトロ、ヤコブ、ヨハネを伴われたが、イエスはひどく苦しみ悩み始め、彼らに言われた。「私は死ぬほど苦しい。ここを離れず、目を覚ましていなさい。」少し先に進んで地にひれ伏し、できることなら、この時を過ぎ去らせてくださるようにと祈り、（中略）再び戻ってご覧になると、弟子たちは眠っていた。まぶたが重くなっていたのである。（中略）イエスは三度目に戻って来て言われた。「まだ眠っているのか。休んでいるのか。もうよかろう。時が来た。人の子は罪人たちの手に渡される。立て、行こう。見よ、私を裏切るものが近づいてきた。」

（マルコ14：32－42）

(3)イエスはそこを出て、いつものようにオリーブ山に行かれると、弟子たちも従った。目的の場所に来ると、イエスは弟子た

ちに、「誘惑に陥らないように祈りなさい」と言われた。そして自分は（中略）ひざまずいてこう祈られた。（中略）イエスは祈り終わって立ち上がり、弟子たちのところに戻ってご覧になると、彼らは心痛のあまり眠り込んでいた。イエスは言われた。「なぜ眠っているのか。誘惑に陥らぬよう、起きて祈っていなさい。」（ルカ22：39－46）

(4)こう話し終えると、イエス弟子たちと一緒にキドロンの谷の向こうへ出て行かれた。そこには園があり、イエスは弟子たちとその中に入られた。イエスを裏切ろうとしていたユダも、その場所を知っていた。イエスは、弟子たちと共に度々ここに集まっておられたからである。それでユダは、一隊の兵士たちと、祭司長たちやファリサイ派の人々の遣わした下役たちを引き連れて、そこにやってきた。松明や灯を武器にしていた。（ヨハネ18：1－3）

**「善蔵を思ふ」（『文芸』第八巻第四号）『太宰治全集第三巻』収録**

⑤馬鹿な、頑迷のこの音楽を、聞きたい人だけは聞くがよい。（七一八頁）

(1)耳のあるものは聞きなさい。（マタイ11：15）

(2)そして、「聞く耳のある者は聞きなさい」と言われた。（マルコ4：9）

(3)（前略）イエスはこのように話して、「聞く耳のあるものは聞きなさい」と大声で言われた。（ルカ8：8）

**「古典風」（『知性』第三巻第六号）『太宰治全集第三巻』収録**

⑥駱駝が針の穴をくぐるとは、それや無理な。出来ませぬて。（二三六頁）

(1)（マタイ19：24）

(2)（マルコ10：25）

(3)（ルカ18：25）

**・一九四二年**

**『ろまん燈籠』（『婦人画報』四四二号・一九四〇年十二月―四四八号・一九四一年六月）『太宰治全集第四巻』収録**

①――この故に、われは望む。男は怒らず争わず。いづれの処にても潔き手をあげて祈らんことを。また女は、羞恥を知り、慎みて宜しきに合ふ衣もて己を飾り、編みたる頭髪と金と真珠と価たかき衣もては飾らず、善き業をもて飾とせん事を。これ神を敬はんと公言する女に適へる事なり。女は凡てのこと従順にして静かに道を学ぶべし。われ、女の、教ふることと、男の上に権を執る事を許さず。ただ静かにすべし。それアダムは前に造られ、エバは後に造られたり。アダムは惑はされず、女は惑

はされて罪に陥りたるなり。されど女もし慎みて信仰と愛と潔きとに居らば、子を生む事によりて救はるべし――。

（一二〇頁）

(1)だから、私が望むのは、男は怒らず争わず、どこででも清い手を上げて祈ることです。同じように、女は折り目正しく、控えめに慎み深く身を飾りなさい。髪を編んだり、金や真珠や高価な服で身を飾ったりするのではなく、むしろ、善い行いで身を飾るのが、神を敬うと公言する女にふさわしいことです。女は静かに、あくまでも従順に学ぶべきです。女が教えたり、男の上に立ったりするのを、私は許しません。むしろ、静かにしているべきです。なぜなら、アダムが初めに造られ、それからエバが造られたからです。また、アダムはだまされませんでしたが、女はすっかりだまされて、道を踏み外しました。しかし、女が慎みをもって、信仰と愛と清さを保ち続けるなら、子を産むことによって救われます。（テモテへの手紙一2：8－15）

**『新ハムレット』（文芸春秋社・七月）『太宰治全集第四巻』収録**

①どこやらに、神の御子のやうな匂ひがいたします。（二一二頁）

②パウロが言つてゐますよ。われ、女の、教ふることと、男の上に権を執る事を許さず。ただ静かにすべ、とね。さうして、女もし慎みて信仰と愛と潔きとに居らば、子を生む事に因りて救はるべし、と言い結んである。

（二五七頁）

(1)（テモテへの手紙一2：12－15）

③愛は言葉だ。言葉が無くなれや、同時にこの世の中に、愛情も無くなるんだ。愛が言葉以外に、実体として何かあると思つてゐたら、大間違ひだ。聖書にも書いてあるよ。言葉は、神と共にあり。言葉は神なりき、之に命あり。この命は人の光成りき、と書いてあるからお母さんに読ませてあげるんだね。

（二五八頁）

(1)初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった。この言は、初めに神と共にあった。万物は言葉によって成った。言葉に拠らず成ったものは何一つなかった。言葉の内に成ったものは、命であった。この命は人の光であった。光は闇の中で輝いている。闇は光に勝たなかった。（ヨハネ1：1－5）

④一ばんはじめ僕たちに、神さまの存在を、はつきり教へてくれたものは、なんだらう。言葉ぢやないか。福音ぢやないか。

（二五九頁）

(1)（ヨハネ1：1－5）

『風の便り』（『文学界』第八巻第十一号、『文芸』第九巻第十一号、『新潮』第三十八巻第十二号、『新潮』第三十八巻第十二号）

『太宰治全集第四巻』収録

①「ヱホバを畏るるは知識の本なり」　（二七八頁）

(1)主を畏れることは知識の初め。／無知なる者は諭しも侮る。

（箴言1：7）

②私はあなたのお手紙を、かならずしも聖書のごとく一字一句、信仰して読んだわけではありません。　（二七九頁）

③おのれを愛するが如く他の者を愛する事の出来る人だけが誠実なのです。　（二八三頁）

(1)・父と母を敬え、また、隣人を自分のように愛しなさい。

（マタイ19：19）

・第二も、これと同じように重要である。『隣人を自分のように愛しなさい。』

（マタイ22：39）

(2)第二の戒めはこれである。『隣人を自分のように愛しなさい。』

この二つにまさる戒めは他にない。　（マルコ12：31）

(3)彼は答えた。「『心を尽くし、魂を尽くし、力を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい、また、隣人を自分のように愛しなさい』とあります。」　（ルカ10：27）

(4)「姦淫するな、殺すな、盗むな、貪るな」、そのほかどんな戒めがあっても、「隣人を自分のように愛しなさい」という言葉に要約されます。　（ローマ信徒への手紙13：9）

(5)なぜなら、律法全体が、「隣人を自分のように愛しなさい」という一句において全うされているからです。

（ガラテヤ信徒への手紙5：14）

(6)もしあなたがたが、聖書に従って、「隣人を自分のように愛しなさい」という最も尊い律法を実行しているのなら、それは結構なことです。　（ヤコブの手紙2：8）

④「汝ら、見られんために己が義を人の前にて行はぬやうに心せよ。」　（二八三頁）

(1)見てもらおうとして、人の前で善行をしないように注意しなさい。　（マタイ6：1）

⑤「なんぢら祈るとき、偽善者の如くからざれ。彼らは人に顕はさんとて、会堂や大路の角に立ちて祈ることを好む。」

（二八四頁）

(1)（マタイ6：5）

⑥「出エジプト記」を読むと、モーゼの努力の程が思ひやられて、胸が一ぱいになります。（中略）四十年間、私は奴隷の一日として絶えることの無かつた不平の声と、謀反、無智、それに対するモーゼの惨憺たる苦心を書いて居ります。　（三〇四頁）

(1)こうしてイスラエルの人々は、四十年の間、人の住む地に入るまでマナを食べた。すなわち、彼らはマナを、カナンの地の境に入るまで食べた。（出エジプト記16：35）

(2)モーセとアロンに導かれ、軍団ごとにエジプトの地を出たイスラエルの人々の旅程は次のとおりである。モーセは主の言葉に従って、旅路に沿って、そのつど出発した所を書き記した。その出発した所によると、次のとおりである。／第一の月の十五日、彼らはラメセスを旅立った。すなわち、過越しの翌日に、イスラエル人はすべてのエジプト人の目の前を意気揚々と出ていった。エジプト人はその時、主が彼らの間で打たれたすべての初子を葬っていた。主は彼らの神々に裁きを下されたのである。（中略）祭司アロンは、主の言葉に従ってホル山に登り、そこで死んだ。それは、イスラエルの人々がエジプトの地を出て四十年目、第五の月の一日であった。（中略）ヨルダン川を隔てエリコの対岸、モアブの平野で、主はモーセに告げられた。（民数記33：1－50）

⑦君は、二言目には、貧乏、貧乏といつて、悲壮がつてゐるやうだが、エゴの自己防衛でなかつたら幸ひだ。（三〇八頁）

(1)（マタイ5：3）

(2)（ルカ6：20）

**「誰」**　（『知性』第四十四巻第十二号）『太宰治全集第四巻』収録

④イエス其の弟子たちとピリポ・カイザリヤの村々に出でゆき、途にて弟子たちに問ひて言ひたまふ「人々は我を誰と言ふか」答へて言ふ「バプテスマのヨハネ、或人はエリヤ、或人は預言者の一人」また問ひて言ふ「なんぢらは我を誰と言ふか」ペテロ答へて言ふ「なんぢはキリスト、神の子なり」（マルコ八章二七）（三一一頁）

(1)イエスは、弟子たちとフィリポ・カイサリアの村々へ出かけられた。その途中、弟子たちに、「人々は、私のことを何者だと言っているか」とお尋ねになった。弟子たちは言った。「洗礼者ヨハネだと言っています。ほかに、エリヤだという人、ほかには、預言者の一人だと言う人もいます。」そこでイエスがお尋ねになった。「それでは、あなたがたは私を何者だと言うのか。」ペトロが答えた。「あなたは、メシアです。」（マタイ16：13－16）

(2)イエスは、フィリポ・カイサリア地方に行ったとき、弟子たちに「人々は、私のことを何者だと言っているか」とお尋ねになった。弟子たちは言った。「洗礼者ヨハネだと言う人、ほかに、エリヤだと言う人、ほかに、エレミヤだとか、預言者の一人だと言う人もいます。」イエスは言われた。「それでは、あなたが

たは私を何者だと言うのか。」シモン・ペトロが答えた。「あなたはメシア、生ける神の子です。」　（マルコ8：27－29）

(3)イエスが一人で祈っておられたとき、弟子たちが御もとに集まって来た。そこでイエスは、「群衆は、私のことを何者だと言っているか」とお尋ねになった。弟子たちは答えた。「洗礼者ヨハネだと言う人、エリヤだと言う人、ほかに、昔の預言者の一人が生き返ったと言う人もいます。」イエスは言われた。「それでは、あなたがたは私を何者だと言うのか。」ペトロが答えた。「神のメシアです。」　（ルカ9：18－21）

②君がいまの人のあやまちを非難することが出来ないとか何とか、キリストみたいに立派なことを言ふもんだから、ちよつと、厭味を言つてみたんだ。　（三二一頁）

**・一九四二年**

**「恥」**　**（『婦人画報』四五五号）『太宰治全集第四巻』収録**

①サムエル後書にありました。「タマル、灰を其の首に蒙り、着たる振袖を裂き、手を首にのせて、呼はりつつ去ゆけり」可愛さうな妹タマル。　（三二四頁）

(1)タマルは、頭に灰をかぶり、着ていた長袖の上着を裂き、手を頭に置いて、大声で泣きながら立ち去った。

（サムエル書下13：19）

**「新郎」**　**（『新潮』第三十九巻第一号）『太宰治全集第四巻』収録**

①明日のことを思ひ煩ふな。明日は明日みづから思ひ煩はん。　（三三五頁）

(1)だから、明日のことを思い煩ってはならない。明日のことは明日自らが思い煩う。その日の苦労は、その日だけで十分である。　（マタイ6：34）

**「律子と貞子」（『若草』第十八巻第二号）『太宰治全集第四巻』収録**

①――イエス或る村に入り給へば、マルタと名づくる女おのが家に迎へ入る。その姉妹にマリヤといふものありて、イエスの足下に坐し、御言を聴きをりしが、マルタ饗応のこと多くして心いりみだれ、御許に進みよりて言ふ。「主よ、姉妹われを一人のこして働かするを、何とも思ひ給はぬか、彼に命じて我を助けしめ給へ」主、答へて言ふ、「マルタよ、マルタよ、汝さまざまの事により、思ひ煩ひて心労す。されど無くてならぬものは多からず、唯一つのみ、マリヤは善きかたを選びたり。此は彼より奪ふべからざるものなり。」（ルカ伝十章三八以下。）　（三二六五頁）

(1)さて、一行が旅を続けているうちに、イエスはある村に入られた。すると、マルタと言う女が、イエスを家に迎え入れた。彼

女にはマリアという妹がいた。マリアは主の足元に座って、その話を聞いていた。マルタは、いろいろともてなしのために忙しくしていたが、そばに立って言った。「主よ、妹は私だけにおもてなしをさせていますが、何ともお思いになりませんか。手伝ってくれるようにおっしゃってください。」主はお答えになった。「マルタ、マルタ、あなたはいろいろなことに気を遣い、思い煩っている。しかし、必要なことは一つだけである。マリアは良い方を選んだ。それを取り上げてはならない。」

（ルカ10：38－42）

**『正義と微笑』**　**（錦城出版・六月）『太宰治全集第五巻』収録**

①わがあしかよわく／けはしき山路／のぼりがたくとも／ふもとにありて／たのしきしらべに／たえずうたはば／ききていさみたつ／ひとこそあらめ／――さんびか第百五十九　（四頁）

(1)二　わがあしかよわく／けはしき山路／のぼりがたくとも／ふもとにありて／たのしきしらべに／たえずうたはバ／きゝていさみたつ／ひとこそあらめ　（コヘレト9：10）

（讃美歌委員会編『讃美歌　第一篇』警醒社・一九〇三年）

（現在刊行されている讃美歌集には掲載されておらず、「讃美歌　百五十九」として収録されたものは管見の限り一九〇三年版のみである）

②「なんぢら断食するとき、偽善者のごとく、悲しき面容をすな。彼らは断食することを人に顕はさんとて、その顔色を害ふなり。誠に汝らに告ぐ、彼らは既にその報いを得たり。なんじは断食するとき、頭に油を塗り、顔を洗へ。これ断食することの人に顕れずして、隠れたるに在す汝の父にあらはれん為なり。さらば隠れたるに見たまふ汝の父は報い給はん。」　（六－七頁）

(1)（マタイ6：16－18）

③心安かれ、我なり、懼るな。　（二十頁）

(1)イエスはすぐに彼らに声をかけ、「安心しなさい。私だ。恐れることはない」と言われた。　（マタイ14：27）

(2)皆はイエスを見ておびえたのである。しかし、イエスはすぐに彼らと話をし、「安心しなさい。私だ。恐れることはない」と言われた。　（マルコ6：50）

(3)イエスは言われた。「私だ。恐れることはない。」

（ヨハネ6：20）

④キリストが、その悲しみの極まりしとき、「アバ、父よ！」と大声で呼んだ気持ちも分かるやうな気がする。　（二十五頁）

(1)彼らに言われた。「私は死ぬほど苦しい。ここを離れず、目を覚ましていなさい。」少し先に進んで地にひれ伏し、できることなら、この時を過ぎ去らせて下さるようにと祈り、こう言わ

れた。「アッバ、父よ、あなたは何でもおできになります。この杯を、私から取りのけてください。しかし、私の望みではなく、御心のままに。」　（マルコ14：34－36）

⑤母のあいより／なほもあつく／地のもとゐより／さらにふかし／ひとのおもひの／うへにそびえ／おほぞらよりも／ひろらかなり／――さんびか第五十二　（二十五頁）

(1)三　母のあいより／なほもあつく／地のもとゐより／さらにふかし／ひとのおもひの／うへにそびえ／おほぞらよりも／ひろらかなり　（ローマ5：8）（『正義と微笑』①におなじ）

⑥「体は衣に勝ならずや。」とあるを未だ読まぬか。（二十八頁）

(1)（マタイ6：25－26）

(2)（ルカ12：23）

⑦われ山にむかひて目をあぐ。わが扶助はいづこよりきたるや。　（三十二頁）

(1)（詩編121：1）

⑧申命記にあり。「汝の兄弟より利息を取るべからず。」　（四十二頁）

(1)利息を取って同胞に貸してはならない。銀の利息も食物の利息も、いかなる利息も取ってはならない。　（申命記23：20）

⑨「ああエルサレム、エルサレム、予言者たちを殺し、遣はされたる人々を石にて撃つ者よ、牝鶏のその雛を翼の下に集むるごとく、我なんぢの子どもを集めんと為しこと幾度ぞや、」といふ所まで読んで、思はず声を挙げて泣いたあの夜を、忘れたか。　（四十三頁）

(1)（マタイ23：37）

(2)（ルカ13：34）

⑩その有閑階級にぺつたり寄食してゐた僕はまあ、なんてみじめな野郎だつたんでせう。富める者の神の国に入るよりは、駱駝の針の孔を通るかた反つて易し。　（四十五頁）

(1)（マタイ19：24）

(2)（マルコ10：25）

(3)（ルカ18：25）

⑪「狐には穴あり、鳥には塒、か。」と僕が言つたら、兄さんは、／「視よ！　花婿をとらるる日来らん。」と言つて笑つた。　（六十四頁）

a (1)（マタイ8：20）

(2)（ルカ9：58）

b (1)花婿が一緒にいる間、婚礼の客はどうして悲しんだりできるだろうか。しかし、花婿が取り去られる日が来る。その時、彼らは断食することになる。　（マタイ9：15）

(2)花婿が一緒にいるのに、婚礼の客は断食できるだろうか。花婿が一緒にいる間は、断食できない。しかし、花婿が取り去られる日が来る。その日には、彼らは断食することになる。

（マルコ2：20）

(3)しかし、花婿が取り去られる日が来る。その日には、彼らは断食することになる。

（ルカ5：35）

⑫「我は復活なり、生命なり、我を信ずる者は死ぬとも生きん。凡そ生きて我を信ずる者は、永遠に死なざるべし。汝これを信ずるか。」

（一〇二頁）

(1)イエスは言われた。「私は復活であり、命である。私を信じる者は、死んでも生きる。生きていて私を信じる者は誰も、決して死ぬことはない。このことを信じるか。（ヨハネ11：25－26）

⑬御心の天のごとく、地にも行はれん事を。

（一〇二頁）

(1)御国が来ますように。／御心が行われますように／天におけるように地の上にも。

（マタイ6：10）

⑭一日の労苦は、一日にて足れり。けふは、なんだか、そんな気持だ。

（一三〇頁）

(1)（マタイ6：34）

⑮「十四章。汝穢はしき物は何も食ふ勿れ。汝らが食ふべき獣畜は是なり即ち牛、羊、山羊、牡鹿、羚羊、小鹿、麈、羱、麋、など。凡て獣畜の中蹄の割れて二つの蹄を成せる反芻獣は汝ら之を食ふべし。但し反芻者と蹄の分れたる者の中汝らの食ふべからざる者は是なり即ち駱駝、兎および山鼠、是らは反芻ども蹄わかれざれば汝らには汚れたる者なり。また豚是は蹄わかるれども反芻ことをせざれば汝らには穢れたる者なり。汝ら是等の肉を食ふべからず、またその死体に捫るべからず。／水におる諸の物の中是のごとき者を汝ら食ふべし即ち凡て翅と鱗のある者は皆汝ら之を食ふべし。凡て翅と鱗のあらざる者は汝らこれを食ふべからず是は汝らには汚れたる者なり。／また凡て潔き鳥は皆汝らこれを食ふべし。但し是等は食ふべからず即ち鵰、黄鷹、鳶、鸇、鷹、黒鷹の類、各種の鴉の類、鴕鳥、梟、鴟、雀鷹の類、鶴、鷺、白鳥、鸚鵡、大鷹、鵠、鶴、鸚鵡の類、鷸および蝙蝠、また凡て羽翼ありて匍うところの者は汝らには汚れたる者なり。汝らこれを食ふべからず。凡て羽翼をもて飛ぶところの潔き物は汝らこれを食ふべし。／凡そ自ら死にたる者は汝ら食ふべからず。」

（一三五－一三六頁）

(1)あなたは、忌むべきものを一切食べてはならない。あなた方が食べてよい動物は次のとおりである。牛、羊、山羊、鹿、ガゼル、のろじか、野山羊、羚羊、かもしか、野羊。反芻するもので、ひづめが割れ、二つに完全に分かれている動物はすべて食

べることが出来る。ただし、反芻するだけか、あるいはひづめが割れているだけのものは食べてはならない。らくだ、野兎、岩狸、これらは反芻するが、ひづめが割れていないので、あなたがたには汚れたものである。豚、これはひづめは割れているが、反芻しないので、あなたがたには汚れたものである。これらの肉を食べてはならない。死骸に触れてはならない。／水の中に住むすべてのもののうち、食べることができるのは次のとおりである。ひれとうろこのあるものはすべて食べることが出来る。ひれやうろこのないものは一切食べてはならない。あなたがたには汚れたものである。／清い鳥はすべて、食べることができる。しかし、次のものは食べてはならない。禿鷲、ひげ鷲、黒禿鷲、赤鳶、隼、鳶の類、烏の類すべて、鷲みみずく、小みみずく、かもめ、はいたかの類、小きんめふくろう、森ふくろう、めんふくろう、こくまる烏、エジプト禿鷲、みさご、こうのとり、鷺の類、やつがしら、こうもり。また、羽があって群がるものはすべて、あなたがたには汚れたものであり、食べてはならない。清い鳥はすべて食べることができる。自然に死んだ動物は一切食べてはならない。町の中にいる寄留者に与えて食べさせるか、外国人に売りなさい。あなたは、あなたの神、主の聖なる民だからである。子山羊をその母の乳で煮てはならない。

（申命記14：3－21）

⑯「ああ信仰うすき者よ、何ぞパン無きことを語り合ふか。未だ悟らぬか。五つのパンを五千人に分かちて、その余りを幾筐ひろひ、また七つのパンを四千人に分かちて、その余りを幾籃ひろひしかを覚えぬか。我が言ひしはパンの事にあらぬを何ぞ悟らざる。」とつくづく嘆息を漏らしてゐたのだ。　（一三七頁）

(1)イエスはそれに気付いて言われた。「信仰の薄い者たちよ。なぜ、パンを持っていないことで議論しているのか。まだ、分からないのか。覚えていないのか。五つのパンを五千人に分け、なお幾つの籠に集めたか。また、七つのパンを四千人に分け、なお幾つの籠に集めたか。パンについて言ったのではないことが、どうして分からないのか。ファリサイ派とサドカイ派の人々のパン種に注意しなさい。」　（マタイ16：8－11）

(2)イエスはそれに気づいて言われた。「なぜ、パンを持っていないことで議論しているのか。まだ、分からないのか。悟らないのか。心がかたくなになっているのか。目があっても見えないのか。耳があっても聞こえないのか。覚えていないのか。私が五千人に五つのパンを裂いたとき、集めたパン切れでいっぱいになった籠は、幾つあったか。」弟子たちは「十二です」と言った。「七つのパンを四千人に裂いたときには、集めたパン切れ

でいっぱいになった籠は、幾つあったか。」「七つです」と言うと、イエスは、「まだ悟らないのか」と言われた。

（マルコ8：17－21）

⑰生活を離れた理想は、――ああ、それは、十字架へ行く路なんだ。さうして、それは神の子の路である。（一三七頁）

⑱いつも明日のパンのことを心配しながらキリストについて歩いてゐた弟子達だつて、つひには聖者になれたのだ。（一三八頁）

⑲人間のみじめさ、自分の醜さに絶望せず、「凡て汝の手に堪ふる事は力を尽くしてこれを為せ。」／努めなければならぬ。十字架から、のがれようとしてゐるのではない。自分の醜いしつぼをごまかさず、これを引きずつて、歩一歩よろめきながら坂路をのぼるのだ。この坂路の果てにあるものは、十字架か、天国か、それは知らない。かならず十字架ときめてしまふのは、神を知らぬ人の言葉だ。ただ、「御意のままになし給へ。」

（一三九頁）

a (1)手の及ぶことはどのようなことでも／力を尽くして行うがよい。／あなたが行くことになる陰府には／業も道理も知恵もない。

（コヘレトの言葉9：10）

b (1)さらに、二度目に向こうへ行って祈られた。「父よ、私が飲まないかぎりこの杯が過ぎ去らないのでしたら、御こころが行われますように。」

（マタイ26：42）

(2)（マルコ14：36）

⑳あとは、天の父におまかせをする。（一五一頁）

(1)（マタイ26：42）

(2)（マルコ14：36）

㉑「なんだ、もう行くのか。神の国は何に似たるか。」／「一粒の芥種のごとし。」と答へたら、／「育ちて樹となれ」と愛情のこもつた口調で言つた。

（一五二頁）

(1)また、別のたとえを彼らに示して言われた。「天の国は、からし種に似ている。人がこれを取って畑に蒔くと、どんな種よりも小さいのに、成長するとどの野菜よりも大きくなり、空の鳥が来て枝に巣を作るほどの木になる。」（マタイ13：31－32）

(2)また、イエスは言われた。「神の国を何にたとえようか。どのようなたとえで示そうか。それは、からし種のようなものである。地に蒔くときには、地上のどんな種より小さいが、蒔くと、成長してどんな野菜よりも大きくなり、葉の陰に空の鳥が巣を作れるほど大きな枝を張る。」（マルコ4：30－32）

(3)そこで、イエスは言われた。「神の国は何に似ているか。何にたとえようか。それは、からし種に似ている。人がこれを取って庭に蒔くと、成長して木になり、その枝には空の鳥が巣を作

る。」　（ルカ13：18－19）

㉒一粒の芥種、樹になるか、樹になるか。　（一六七頁）

(1)（マタイ13：31－32）

(2)（マルコ4：30－32）

(3)（ルカ13：18－19）

㉓なんぢら断食するとき、――あの、十六歳の春に日記の巻頭に大きく書きつけて置いたキリストの言葉が、その時、あざやかに蘇つてきた。なんぢは断食するとき、頭に油を塗り、顔を洗へ。くるしみは誰にだつてあるのだ。ああ、断食は微笑と共に行へ。　（一七二頁）

(1)（マタイ6：16）

㉔磐の上に、小さい家を築かう。　（一七六頁）

(1)そこで、私のこれらの言葉を聞いて行うものは皆、岩の上に自分の家を建てた賢い人に似ている。　（マタイ7：24）

(2)それは、地面を深く掘り下げ、岩の上に土台を据えて家を建てる人に似ている。洪水になって水かその家に押し寄せたが、しっかり建ててあったので、びくともしなかった。　（ルカ6：48）

㉕わがゆくみちに／はなさきかをり／のどかなれとは／ねがひまつらじ／――さんびか第三百十三　（一七六頁）

(1)わがゆくみちに／はなさきかをり／のどかなれとハ／ねがひまつらじ／いろかめでたき／うばらさへ／とげあるものを

（『正義と微笑』①に同じ。）

**「待つ」**　（『女性』博文館・六月）『太宰治全集第四巻』収録

⑤ああ、けれども、私は待つてゐるのです。胸を躍らせて待つてゐるのだ。　（三六九頁）

(1)主よ、私はあなたの救いを待ち望む。　（創世記49：18）

(2)もし人が死ねば、また生きるでしょうか。／そうであれば、解き放たれる時が来るまで／すべての苦役の日々を忍んで私は待ちましょう。　（ヨブ記14：14）

(3)a主を待ち望め。／勇ましくあれ、心を強くせよ。／主を待ち望め。　（詩編27：14）

b私の魂よ／なぜ打ち沈むのか、なぜ呻くのか。／神を待ち望め。／私はなお、神をほめたたえる／「御顔こそ、わが救い」と。　（詩編42：6）

cイスラエルよ、主を待ち望め。／主のもとに慈しみがあり、そのもとに豊かな贖いがある。　（詩編130：7）

(4)アリマタヤ出身のヨセフが、思い切ってピラトのもとへ行き、イエスの遺体の引き取りを願い出た。この人は高名な議員であり、自らも神の国を待ち望んでいた人であった。　（マルコ15：43）

(5) a民衆はメシアを待ち望んでいて、ヨハネについて、もしかしたら彼がメシアではないかと、皆心の中で考えていた。
（ルカ3：15）
b同僚たちの決議や行動には同意しなかった。ユダヤ人の町アリマタヤの出身で、神の国を待ち望んでいたのである。
（ルカ23：51）

(6) a被造物は、神の子たちが現れるのを切に待ち望んでいます。
（ローマ信徒への手紙8：19）
b被造物だけなく、霊の初穂を待っている私たちも、子にしていただくこと、つまり、体の贖われることを、心の中で呻きながら待ち望んでいます。
（ローマ信徒への手紙8：23）

(7) その結果、あなたがたはどんな賜物にも欠けるところがなく、私たちの主イエス・キリストが現れるのを待ち望んでいます。
（コリント信徒への手紙一1：7）

(8) 私たちは、霊により、信仰に基づいて義とされる希望を、心から待ち望んでいます。
（ガラテヤ信徒への手紙5：5）

(9) しかし、私たちの国籍は天にあります。そこから、救い主である主イエス・キリストが来られるのを、私たちは待ち望んでいます。
（フィリピの信徒への手紙3：20）

(10) しかし、私たちは、神の約束に従って、義の宿る新しい天と新しい地とを待ち望んでいます。
（ペトロの手紙二3：13）

**「花火」**　（『文芸』第十巻第十号）『太宰治全集第五巻』収録

①「また兄さんに、だまされたやうな気が致します。七度の七十倍、といふと――」
（二二八頁）

(1)（マタイ18：22）

**・一九四三年**

**『故郷』**　（『新潮』第四十巻第一号）『太宰治全集第五巻』収録

①聖書にある「蕩児の帰宅」を、私はチラと思ひ浮かべた。
（二八〇頁）

(1) また、イエスは言われた。「ある人に息子が二人いた。弟の方が父親に、『お父さん、私に財産の分け前をください』と言った。それで、父親は二人に身代を分けてやった。何日も立たないうちに、弟は何もかもまとめて遠い国に旅立ち、そこで身を持ち崩して財産を無駄遣いしてしまった。何もかも使い果たしたとき、その地方に酷い飢饉が起こって、彼は食べるにも困り始めた。（中略）そこで、彼はそこをたち、父親のもとに行った。ところが、まだ遠く離れていたのに、父親は息子を見つけて、憐れに思い、走り寄って首を抱き、接吻した。息子は言った。『お父さん、私は天に対しても、またお父さんに対しても罪を犯し

ました。もう息子と呼ばれる資格はありません。』しかし、父親は僕たちに言った。『急いで、いちばん良い衣を持って来て、この子に着せ、手に指輪をはめてやり、足には履物を履かせなさい。それから、肥えた子牛を引いて来て屠りなさい。食べて祝おう。この息子は、死んでいたのに生き返り、いなくなっていたのに見つかったからだ。』そして、祝宴を始めた。

（ルカ15：11－24）

## ・一九四四年

**「散華」**　（『新若人』第五巻第三号）『太宰治全集第六巻』収録

①キリストの復活を最後まで信じなかつたトマスみたいなところがある。いけないことだ。「我はその手に釘の痕を見、わが指を釘の痕にさし入れ、わが手をその腋に入るるにあらずば信ぜじ」などといふ剛情は、まつたく、手がつけられない。

（八十七頁）

(1)そこで、ほかの弟子たちが、「私たちは主を見た」と言うと、トマスは言った。「あの方の手に釘の跡を見、この指を釘跡に入れてみなければ、また、この手をそのわき腹に入れなければ、私は決して信じない。」

（ヨハネ20：25）

**「雪の夜の話」**　（『少女の友』第三十七巻第五号）『太宰治全集第六巻』収録

②「でも、とうさんのお眼は、綺麗な景色を百倍も千倍も見て来たかはりに、きたないものも百倍も千倍も見て来られたお眼ですものね。」／「さうよ、さうよ。プラスよりも、マイナスがずつと多いのよ。だからそんなに黄色く濁つてゐるんだ。わあい、だ。」

（一二二頁）

(1)（マタイ6：22－23）

(2)（ルカ11：34－36）

**「花吹雪」**　（『佳日』肇書房・八月）『太宰治全集第六巻』収録

①右の頬を打たれたなら左の頬を、といふのは、あれは勝ち得べき腕力を持つてゐても忍んで左の頬を差出せ、といふ意味のやうでもあるが、お前の場合は、まるで、へどもどして、（中略）左右の頬をさんざん殴らせてゐるやうな図と似てゐるではないか。

（十四頁）

(1)（マタイ5：39）

(2)（ルカ6：29）

②「われ地に平和を投ぜんために来たれりと思ふな、平和にあらず、反つて剣を投ぜんために来れり」とさへ言つてゐるではないか。

（十四頁）

(1)私が来たのは地上に平和をもたらすためだ、と思ってはならない。平和ではなく、剣をもたらすために来たのだ。
（マタイ10：34）

(2)あなたがたは、私が地上に平和をもたらすために来たと思うのか。そうではない。言っておくがむしろ分裂だ。（ルカ12：51）

③怒つた時には、縄切を振りまはしてエルサレムの宮の商人たちを打擲したほどの人である。
（十四頁）

(1)（マタイ21：12－13）
(2)（マルコ11：15－17）
(3)（ルカ19：45－46）
(4)（ヨハネ2：13－21）

**・一九四五年**

**『惜別』　（朝日新聞社・九月）『太宰治全集第七巻』収録**

①周さんは私と同様、キリスト教の隣人愛には大いに敬意を表し、十字架につかざるを得ない義人の宿命を仰恋することに於いても敢へて人後に落ちるものでは無かつたが、しかし、どうも教会の職業的なヤソ坊主の偽善家みたいな悲愴な表情や、またその教会に通ふ若い男女のキザに澄ました態度に辟易して、仙台の市中にずいぶんたくさん散在してゐる教会堂にも、もつぱら敬遠の策をとり、殊に周さんなどは、ヤソのヤソくさきは真のヤソに非ず、と断じ、支那の儒者先生たちが孔孟の精神を歪曲せしめたやうに、キリストの教へも、外国のヤソ坊主たちが堕落せしめてしまつたのだ、とさへ語つてゐた事があつた。それなのに、いま彼は、美以教会に行つて来たといふ。
（九十九頁）

(1)（マタイ19：19・22：39）
(2)（マルコ12：31）
(3)（ルカ10：27）
(4)（ローマ信徒への手紙13：9）
(5)（ガラテヤ信徒への手紙5：14）
(6)（ヤコブの手紙2：8）

②「（前略）それでけふ、ふらふら、教会に行つてみたのですが、でも、どうもあの西洋風の大袈裟な儀礼には納得できないものがあつて、失望しました。しかし、説教がちやうど旧約の『出エジプト記』の箇所で、モオゼがその同法を奴隷の境涯から救ふのにどれほどの苦労をしたか、それを聞いて、ぞつとしました。（中略）脱出してモオゼについてきた百万の同胞は、モオゼに感謝するどころか、一人残らずぶつぶついひだしてモオゼを呪い、（中略）『我儕エジプトの地において、肉の鍋の側に坐

り、飽までにパンを食ひし時に、ヱホバの手によりて、死にたらばよかりしものを。汝はこの曠野に我等を導きいだして、この全会を飢に死なしめんとするなり。』などと思ひきり口汚い無智な不平ばかり並べるのですからねえ、（後略）」（一〇一頁）

(1)（出エジプト記16：3）

③「ええ、しかしそれまでの四十年間の歳月、飲まず食はずの辛苦を不平の同胞にこらへてもらはなければならなかつたのですよ。出来ることでせうか。（後略）」（一〇二頁）

(1)（出エジプト記16：35）

(2)（民数記33：1－50）

④「（前略）キリスト教に就いても、僕は、キリストの『おのれを愛するが如く隣人を愛せよ』といふ思想には非常な尊敬を感じ、ほとんどキリストにすがりたい気持にさへなつた事もあるのですが、しかし、あの教会の大袈裟な身振りは、私の信仰を遮るのです。（後略）」（一〇四頁）

(1)（マタイ19：19・22：39）

(2)（マルコ12：31）

(3)（ルカ10：27）

(4)（ローマ信徒への手紙13：9）

(5)（ガラテヤ信徒への手紙5：14）

(6)（ヤコブの手紙2：8）

**『パンドラの匣』**　**（「東奥日報」九月二十日―十月二十九日、「河北新報」十月二十日―翌年一月七日）『太宰治全集第七巻』収録**

①「（前略）わしなんかは、自由思想の本家本元は、キリストだとさへ考へてゐる。思ひ煩ふな、空飛ぶ鳥を見よ、播かず、刈らず、蔵に収めず、なんてのは素晴らしい自由思想ぢやないか。わしは西洋の思想は、すべてキリストの精神を基底にして、或いはそれを敷衍し、或いはそれを卑近にし、或いはそれを懐疑し、人さまざまの所説があつても結局、聖書一巻に結びついてゐると思ふ。科学でさへ、それと無関係ではないのだ。（中略）日本人は、西洋の哲学、科学を研究するよりさきに、まづ聖書一巻の研究をしなければならぬ筈だつたのだ。わしは別にクリスチャンではないが、しかし日本が聖書の研究もせずに、ただやたらに西洋文明の表面だけを勉強したところに、日本の大敗北の真因があつたと思ふ。自由思想でも何でも、キリストの精神を知らなくては、半分も理解できない。」（三七六頁）

(1)（マタイ6：25－26）

(2)（ルカ12：22－27）

②「（前略）キリストも、いつさい誓ふなｇ、と言つてゐる。明日の事を思ふなｈ、とも言つてゐる。実に、自由思想の大先輩で

はないか。狐には穴あり、鳥には巣あり、されど人の子には枕するところなし。、とはまた、自由思想家の嘆きといつていいだらう。（後略）」　（三七七頁）

a (1)（マタイ5：34）

b (1)（マタイ6：34）

c (1)（マタイ8：20）

(2)（ルカ9：58）

③「（前略）空飛ぶ鳥を見よ、です。主義なんて問題ぢやないんです。（後略）」　（四〇二頁）

(1)（マタイ6：25－26）

(2)（ルカ12：22－27）

**『お伽草紙』　（筑摩書房・十月）『太宰治全集第七巻収録』**

①「（前略）どうもね、爬虫類だからね、蛇の親類なんだからね、信用のないのも無理がねえよ。しかし私は、エデンの園の蛇ぢやない、はばかりながら日本の亀だ。（後略）」

（「浦島さん」一七七頁）

(1)・神である主が造られたあらゆる野の獣の中で、最も賢いのは蛇であった。

（創世記3：1）

・神である主は女に言われた。「何ということをしたのか。」女は答えた。「蛇がだましたのです。それで私は食べたのです。」／神である主は蛇に向かって言われた。／「このようなことをしたお前は／あらゆる家畜、あらゆる野の獣の中で／もっとも呪われる。／お前は這いずり回り／生涯にわたって塵を食べることになる。／お前と女、お前の子孫と女の子孫との間に／私は敵意を置く／彼はお前の頭を砕き、お前は彼のかかとを砕く。」

（創世記3：13－15）

②「（前略）私にもよくわかりませんが、その貝の中に何かはひつてゐるのぢやないんですか？」と亀は、ここに於いて、かのエデンの園の蛇の如く、何やら人の好奇心をそそるやうな妙な事を、ふいと言つた。やはりこれも、爬虫類共通の宿命なのだろうか。いやいやさうきめてしまふのは、この善良の亀に対して気の毒だ。亀自身も以前、浦島に向つて「しかし私は、エデンの園の蛇ぢやない、はばかりながら日本の亀だ。」と豪語してゐる。信じてやらなけりや可哀想だ。それにまた、この亀のこれまでの浦島に対する態度から判断しても、決してかのエデンの園の蛇の如く、佞奸邪知にして、恐ろしい破滅の誘惑を囁くやうな性質のものでは無いやうに思はれる。

（「浦島さん」二〇一－二〇二頁）

(1)（創世記3：1・13－15）

・一九四六年

**「十五年間」（『文化展望』創刊号・四月）『太宰治全集第八巻』収録**

①おのれを愛するが如く、汝の隣人を愛せよ。それからでなければ、どうにもかうにもなりやしないのだよ。（四十三頁）

(1)（マタイ19：19・22：39）
(2)（マルコ12：31）
(3)（ルカ10：27）
(4)（ローマ信徒への手紙13：9）
(5)（ガラテヤ信徒への手紙5：14）
(6)（ヤコブの手紙2：8）

②「（前略）わしなんかは、自由思想の本家本元は、キリストだとさへ考へてゐる。思ひ煩ふな、空飛ぶ鳥を見よ、播かず、刈らず、蔵に収めず、なんてのは素晴らしい自由思想ぢやないか。わしは西洋の思想は、すべてキリストの精神を基底にして、或いはそれを敷衍し、或いはそれを卑近にし、或いはそれを懐疑し、人さまざまの所説があつても結局、聖書一巻に結びついてゐると思ふ。科学でさへ、それと無関係ではないのだ。（中略）日本人は、西洋の哲学、科学を研究するよりさきに、まづ聖書一巻の研究をしなければならぬ筈だつたのだ。わしは別にクリスチヤンではないが、しかし日本が聖書の研究もせずに、ただやたらに西洋文明の表面だけを勉強したところに、日本の大敗北の真因があつたと思ふ。自由思想でも何でも、キリストの精神を知らなくては、半分も理解できない。」（六十一頁）

(1)（マタイ6：25－26）
(2)（ルカ12：22－27）

③「（前略）キリストも、いつさい誓ふな[a]、と言つてゐる。明日の事を思ふな[b]、とも言つてゐる。実に、自由思想の大先輩ではないか。狐には穴あり、鳥には巣あり、されど人の子には枕するところなし[c]、とはまた、自由思想家の嘆きといつていいだらう。（後略）」（六十二頁）

a (1)（マタイ5：34）
b (1)（マタイ6：34）
c (1)（マタイ8：20）
(2)（ルカ9：58）

**「苦悩の年間」（『新文芸』第一巻第三号）『太宰治全集第八巻』収録**

①汝らおのれを愛するが如く、汝の隣人を愛せ。（七十六頁）

(1)（マタイ19：19・22：39）
(2)（マルコ12：31）
(3)（ローマ信徒への手紙13：9）
(4)（ガラテヤ信徒への手紙5：14）

(5)（ヤコブの手紙2：8）

②博愛主義。雪の四つ辻に、ひとりは提燈を持ってうずくまり、ひとりは胸を張つて、おお神様、を連発する。提燈持ちは、アアメンと呻く。私は噴き出した。（七十七頁）

(1)（マタイ6：5）

③キリスト。私はそのひとの苦悩だけを思つた。（八十頁）

**『冬の花火』（『展望』第六号）『太宰治全集第八巻』収録**

①気の合った友だちばかりで田畑を耕して、桃や梨や林檎の木を植ゑて、ラジオも聞かず、新聞も読まず、手紙も来ないし、選挙も無いし、演説も無いし、みんなが自分の過去の罪を自覚して気が弱くて、それこそ、おのれを愛するが如く隣人を愛して、さうして疲れたら眠つて、そんな部落を作れないものかしら。（一四二頁）

(1)（マタイ19：19・22：39）

(2)（マルコ12：31）

(3)（ルカ10：27）

(4)（ローマ信徒への手紙13：9）

(5)（ガラテヤ信徒への手紙5：14）

(6)（ヤコブの手紙2：8）

**「チャンス」（『芸術』I・七月）『太宰治全集第八巻』収録**

①キリストの愛、などと言ひ出すのは大袈裟だが、あのひとの教へる「隣人愛」ならばわかるのだが、恋愛ではなく「異性を愛する」といふのは、私にはどうも偽善のやうな気がしてならない。（八十四頁）

(1)（マタイ19：19・22：39）

(2)（マルコ12：31）

(3)（ルカ10：27）

(4)（ローマ信徒への手紙13：9）

(5)（ガラテヤ信徒への手紙5：14）

(6)（ヤコブの手紙2：8）

**「春の枯葉」（『人間』第一巻第九号）『太宰治全集第八巻』収録**

①イエス、答をなし給はず、か。（二〇〇頁）

(1)しかし、祭司長たちや長老たちから訴えがなされた時は、何もお答えにならなかった。すると、ピラトは「聞こえないのか、あんなにお前に不利な証言をしているのに」と言った。しかし、総督が非常に不思議に思うほどに、イエスはどんな訴えにも一言もお答えにならなかった。（マタイ27：12－14）

(2)しかし、イエスは黙り続け、なにもお答えにならなかった。（マルコ14：61）

(3)それで、いろいろと尋問したが、イエスは何もお答えにならなかった。（ルカ23：9）

(4)再び官邸に入って、「お前はどこから来たのか」とイエスに言った。しかし、イエスは答えようとされなかった。（ヨハネ19：9）

②聖書にこれあり。赦される事の少きものは、その愛する事もまた少し。この意味がわかるか。間違ひをした事がないといふ自自信を持つてゐる奴に限つて薄情だといふ事さ。罪多き者はその愛深し。（二〇一頁）

(1)だから、言っておく。この人が多くの罪を赦されたことは、私に示した愛の大きさで分かる。赦されることの少ないものは、愛することも少ない。（ルカ7：47）

**「親友交歓」**　**（『新潮』第四十三巻第十二号）**

**『太宰治全集第八巻』収録**

①圧倒せられてゐたのだ。勝目が無かつたのだ。キリストだつて、時われに利あらずと見るや、「かくして主は、のがれ去り給へり」といふ事になつてゐるではないか。（二四一頁）

(1)しかし、イエスは人々の間を通り抜けて立ち去られた。（ルカ4：30）

(2)そこで、ユダヤ人たちはまたイエスを捕らえようとしたが、イエスは彼らの手を逃れて、去って行かれた。（ヨハネ10：39）

**・一九四七年**

**「トカトントン」（『群像』第二巻第一号）『太宰治全集第八巻』収録**

①真の思想は、叡智よりも勇気を必要とするものです。マタイ伝十章、二八、「身を殺して霊魂をころし得ぬ者どもを懼るるな、身と霊魂とをゲヘナにて滅し得る者をおそれよ。」この場合の「懼る」は、「畏敬」の意にちかいやうです。このイエスの言に、霹靂を感ずる事が出来たら、君の幻聴は止む筈です。不尽。（二八八頁）

(1)体は殺しても、命は殺すことのできない者どもを恐れるな。むしろ、命も体もゲヘナで滅ぼすことのできる方を恐れなさい。（マタイ10：28）

(2)誰を恐れるべきか、教えよう。それは、殺した後で、ゲヘナに投げ込む権威を持っている方だ。そうだ。言っておくが、この方を恐れなさい。（ルカ12：5）

**「メリイクリスマス」**　**（『中央公論』第六十二巻第一号）**

**『太宰治全集第八巻』収録**

②いつの時代でも本当の事をいつたら殺されますわね、ヨハネでも、キリストでも、さうしてヨハネなんかには復活さへ無いん

ですからね、といつた事もあつた。　（二九二頁）

**「父」**　**（『人間』第二巻第四号）『太宰治全集第八巻』収録**

①イサク、父アブラハムに語りて、／父よ、と曰ふ。／彼、答へて、／子よ、われ此にあり、／といひければ、／――創世記二十二ノ七　（三五〇頁）

(1)イサクが、父のアブラハムに、「お父さん」と呼びかけると、彼は、「息子よ、何か」と答えた。そこでイサクは、「火と薪はここにありますが、焼き尽くすいけにえにする子羊はどこですか」と尋ねた。　（創世記22：7）

②義のために、わが子を犠牲にするという事は、人類がはじまつて、すぐその直後に起つた。信仰の祖といわれているアブラハムが、その信仰の義のために、わが子を殺そうとした事は、旧約の創世記に録されていて有名である。／ヱホバ、アブラハムを試みんとて、／アブラハムよ、／と呼びたまふ。／アブラハム答へていふ、／われここにあり。／ヱホバ言ひたまひけるは、／汝なんじの愛する独子、すなはちイサクを携へ行き、かしこの山の頂きに於て、イサクを燔祭として献ぐべし。／アブラハム、朝つとに起きて、その驢馬に鞍を置き、愛するひとりごイサクを乗せ、神のおのれに示したまへる山の麓にいたり、イサクを驢馬よりおろし、すなはち燔祭の柴薪をイサクに背負はせ、われはその手に火と刀を執りて、二人ともに山をのぼれり。／イサク、父アブラハムに語りて、／父よ、／と言ふ。／彼、こたへて、／子よ、われここにあり、／といひければ、／イサクすなはち父に言ふ、／火と柴薪は有り、されど、いけにへの小羊は何処にあるや。／アブラハム、言ひけるは、／子よ、神みづから、いけにへの小羊を備へたまはん。／斯かくして二人ともに進みゆきて、遂に山のいただきに到れり。／アブラハム、壇を築き、柴薪をならべ、その子イサクを縛りて、之これを壇の柴薪の上に置せたり。／すなはち、アブラハム、手を伸べ、刀を執りて、その子を殺さんとす。／時に、ヱホバの使者、天より彼を呼びて、／アブラハムよ、／アブラハムよ、／と言へり。／彼言ふ、／われ、ここにあり。／使者の言ひけるは、／汝の手を童子より放て、／何をも彼に為すべからず、／汝はそのひとりごをも、わがために惜まざれば、われいま汝が神を畏るるを知る。／云々といふやうな事で、イサクはどうやら父に殺されずにすんだのであるが、しかし、アブラハムは、信仰の義者たる事を示さんとして躊躇せず、愛する一人息子を殺そうとしたのである。　（三五〇－三五二頁）

(1)これらのことの後、神はアブラハムを試みられた。神が、「アブラハムよ」と呼びかけると、彼は、「はい、ここにおります」

と答えた。神は言われた。「あなたの息子、あなたの愛する独り子イサクを連れて、モリヤの地に行きなさい。そして私が示す一つの山で、彼を焼き尽くすいけにえとして献げなさい。」アブラハムは朝早く起きて、ろばに鞍を置き、二人の従者と息子イサクを連れ、焼き尽くすいけにえに用いる薪を割り、神が示した場所へと出かけて行った。三日目になって、アブラハムが目を上げると、遠くにその場所が見えた。アブラハムは従者に言った。「ろばと一緒にここにいなさい。私と子どもはあそこまで行き、礼拝をしてまた戻って来る。」アブラハムは焼き尽くすいけにえに用いる薪を取って、息子イサクに背負わせ、自分は火と刃物を手に持った。こうして二人は一緒に歩いて行った。イサクが父のアブラハムに、「お父さん」と呼びかけると、彼は、「息子よ、何か」と答えた。そこでイサクは、「火と薪はここにありますが、焼き尽くすいけにえにする子羊はどこですか」と尋ねた。するとアブラハムは、「息子よ、焼き尽くすいけにえの子羊は、神ご自身が備えてくださる」と答え、二人はさらに続けて一緒に歩いて行った。／神が示された場所に着くと、アブラハムはそこに祭壇を築き、薪を並べ、息子イサクを縛って祭壇の薪の上に載せた。アブラハムは手を伸ばして刃物を取り、息子を屠ろうとした。すると、天から主の使いが呼びかけ、「アブラハム、アブラハム」と言った。彼が、「はい、ここにおります」と答えると、主の使いは言った。「その子に手を下してはならない。何もしてはならない。あなたが神を畏れる者であることが今、分かった。あなたは自分の息子、自分の独り子を私のために惜しまなかった。」

（創世記22：1－12）

③その解明は出来ないけれども、しかし、アブラハムは、ひとりごを殺さんとし、宗吾郎は子わかれの場を演じ、私は意地になって地獄にはまり込まなければならぬ、その義とは、義とは、ああやりきれない男性の、哀しい弱点に似ている。（三六四頁）

**『斜陽』（『新潮』第四十四巻第七号―第四十四巻第十号）**

**『太宰治全集第九巻』収録**

①機にかなひて語る言は銀の彫刻物に金の林檎を嵌めたるが如し、といふ聖書の箴言を思ひ出し、こんな優しいお母さまを持つてゐる自分の幸福を、つくづく神さまに感謝した。

（三十四頁）

(1)銀細工に付けられた金のりんごは／時宜に適って語られる言葉。

（箴言25：11）

②けれども、けさ、鳩のごとく素直に、蛇のごとく慧かれ、といふイエスの言葉をふと思ひ出し、奇妙に元気が出て、お手紙を

差し上げる事にしました。　（七十八頁）

(1)私があなたがたを遣わすのは、狼の中に羊を送り込むようなものである。だから、あなたがたは蛇のように賢く、鳩のように無垢でありなさい。　（マタイ10：16）

③鳩のごとく素直に、蛇のごとく慧く、私は、私の恋をしとげたいと思ひます。　（八十一頁）

(1)（マタイ10：16）

④「（前略）我等は、何とも苦しくて、実に心は熱すれども肉体よわく、とてもママの傍にゐる気力は無い。」　（一二二頁）

(1)誘惑に陥らぬよう、目を覚まして祈っていなさい。心ははやっても、肉体は弱い。　（マタイ26：41）

(2)誘惑に陥らぬよう、目を覚まして祈っていなさい。心ははやっても、肉体は弱い。　（マルコ14：38）

⑤私は、ピエタのマリヤに似てゐると思つた。　（一二四頁）

⑥イエスが、この世の宗教家、道徳家、学者、権威者の偽善をあばき、神の真の愛情といふものを少しも躊躇するところなくありのままに人々に告げあらはさんがために、その十二弟子をも諸方に派遣なさらうとするに当つて、弟子たちに教へ聞かせたお言葉は、私のこの場合にも全然、無関係でないやうに思はれた。／「帯のなかに金・銀または銭を持つな。旅の嚢も、二枚の下衣も、鞋も、杖も持つな[a]。視よ、我なんぢらを遣すは、羊を豺狼のなかに入るるが如し。この故に蛇のごとく慧く、鴿のごとく素直なれ。人々に心せよ、それは汝らを衆議所に付し、会堂にて鞭うたん。また汝等わが故によりて、司たち王たちの前に曳かれん。かれら汝らを付さば、如何になにを言はんと思ひ煩ふな、言ふべき事は、その時さづけられるべし。これ言ふものは汝等にあらず、其の中にありて言たひまふ汝らの父の霊なり。又なんぢら我が名のために凡ての人に憎まれん。されど終りまで耐へ忍ぶものは救はるべし。この町にて、責めらるる時は、かの町に逃れよ。誠に汝らに告ぐ、なんぢらイスラエルの町々を巡り尽さぬうちに人の子は来るべし[b]。／身を殺して霊魂をころし得ぬ者どもを懼るな、身と霊魂とをゲヘナにて滅し得る者ものをおそれよ[c]。われ地に平和を投ぜんために来れりと思ふな、平和にあらず、反つて剣を投ぜん為ために来れり。それ我が来れるは人をその父より、娘をその母より、嫁をその姑嫜より分たん為なり。人の仇は、その家の者なるべし。我よりも父または母を愛する者は、我に相応しからず。我よりも息子または娘を愛する者は、我に相応しからず。又おのが十字架をとりて我に従はぬ者は、我に相応しからず。生命を得る者は、これを失ひ、我ために生命を失ふ者は、これを得べし[d]」

（一二五－一二六頁）

a

(1)帯の中に金貨も銀貨も銅貨も入れてはならない。旅には袋も二枚の下着も、履物も杖も持って行ってはならない。

（マタイ10：9－10）

(2)次のように命じられた。旅には杖一本のほか何も持たず、パンも、袋も、また帯の中に金も持たず、ただ履物は履くように、そして「下着は二枚着てはならない」と。また、こういわれた。「どこでも、ある家に入ったら、その土地から出ていくまでは、そこにとどまりなさい。あなたがたを受け入れず、あなたがたに耳を傾けようともしない所があれば、そこを出ていくとき、抗議のしるしに足の塵を払い落としなさい。」

（マルコ6：8－9）

(3)次のように言われた。「旅には何も持って行ってはならない。杖も袋もパンも金も持って行ってはならない。下着も二枚は持つな。どこかの家に入ったら、そこにとどまって、その家から旅立ちなさい。あなたがたを受け入れない者がいれば、その町を出ていくとき、彼らに対する抗議のしるしに足の誇りを払い落としなさい。」

（ルカ9：3－4）

b

(1)私があなたがたを遣わすのは、狼の中に羊を送り込むようなものである。だから、あなたがたは蛇のように賢く、鳩のように無垢でありなさい。人々には用心しなさい。あなたがたは地方法院に引き渡され、会堂で鞭打たれる。また、私のために総督や王の前に引き出されて、彼らや異邦人に証しをすることになる。引き渡されたときは、何をどう言おうかと心配してはならない。言うべきことは、その時に示される。というのは語るのはあなたがたではなく、あなたがたの中で語ってくださる父の霊だからである。（中略）また、私の名のために、あなたがたはすべての人に憎まれる。しかし、最後まで耐え忍ぶ者は救われる。一つの町で迫害されたときは、他の町へ逃げなさい。よく言っておく。あなたがたがイスラエルの町を回り終わらないうちに、人の子は来る。

（マタイ10：16－23）

(2)あなたがたは、自分のことに気を付けていなさい。あなたがたは、地方法院に引き渡され、会堂で打ち叩かれる。また、私のために総督や王の前に立たされて、証をすることになる。こうして、まず、福音がすべての民族に延べ伝えられねばならない。連れて行かれ、引き渡された時、何を言おうかと心配してはならない。その時には、あなたがたに示されることを話せばよい。話すのはあなたがたではなく、聖霊なのだ。兄弟は兄弟を、父は子を死に渡し、子は親に反抗して死

なせるだろう。また、私の名のために、あなたがたはすべての人に憎まれる。しかし、最後まで耐え忍ぶ者は救われる。

（マルコ13：9－13）

(3)しかし、これらのことがすべて起こる前に、人々はあなたがたを捕らえて迫害し、会堂や牢に引き渡し、私の名の為に王や総督の前に引っ張っていく。それは、あなたがたにとって証をする機会となる。だから、前もって弁明の準備はするまいと、心に決めなさい。どんな反対者でも、対抗も反論もできないような言葉と知恵を、私があなたがたに授けるからである。あなたがたは、親、兄弟、親族、友人にまで裏切られ、中には殺される者もいる。また、私の名のために、すべての人に憎まれる。しかし、あなたがたの髪の毛一本も失われることはない。忍耐によって、あなたがたは命を得なさい。

（ルカ21：12－19）

c
(1)（マタイ10：28）
(2)（ルカ12：15）

d
(1)私が来たのは地上に平和をもたらすためだ、と思ってはならない。平和ではなく、剣をもたらすために来たのだ。私は敵対させるために来たからである。人をその父に／娘を母に／嫁をしゅうとめに。／こうして、家族の者が敵となる。／私よりも父や母を愛する者は、私にふさわしくない。私よりも息子や娘を愛する者も、私にふさわしくない。また、自分の十字架を取って私に従わない者は、私にふさわしくない。自分の命を得る者は、それを失い、私のために命を失うものは、それを得るのである。

（マタイ10：34－39）

(2)「私が来たのは、地上に火を投じるためである。その火が既に燃えていたらと、どんなに願っていることか。しかし、私には受けねばならない洗礼がある。それが終わるまで、私はどんなに苦しむことだろう。あなたがたは、私が地上に平和をもたらすために来たと思うのか。そうではない。言っておくが、むしろ分裂だ。一家五人は、三人が二人と、二人が三人と対立して分かれることになる。父は子と、子は父と／母は娘と、娘は母と／しゅうとめは嫁と、嫁はしゅうとめと／対立して分かれる。」

（ルカ12：49－53）

⑦何だかわからぬ愛のために、恋のために、その悲しさのために、身と霊魂をゲヘナにて滅し得る者、ああ、私は自分こそ、それだと言ひ張りたいのだ。

（一二六頁）

(1)（マタイ10：28）
(2)（ルカ12：15）

⑧直治の弱味にすかさず附け込み、謂はば蛇のごとく慧く、私は

バツグにお化粧品やパンなど詰め込んで、きはめて自然に、あのひとと逢ひに上京する事が出来た。（一二七頁）

(1)（マタイ10：16）

⑨「二羽の雀は一銭a、とは、ありや高いんですか？　安いんですか？」／と若い紳士。／「一厘も残りなく償はずばb、といふ言葉もあるし、或者には五タラント、或者には二タラント、或者には一タラント。なんて、ひどくややこしい譬話もあるし、キリストも勘定はなかなかこまかいんだ。」（一三三頁）

a (1)二羽の雀は一アサリオンで売られているではないか。だが、その一羽さえ、あなたがたの父のお許しがなければ、地に落ちることはない。（マタイ10：24）

(2)五羽の雀は二アサリオンで売られているではないか。だが、その一羽さえ、神の前で忘れられてはいない。（ルカ12：6）

b（マタイ5：25－26）

c (1)それぞれの力に応じて、一人には五タラントン、一人には二タラントン、もう一人には一タラントンを預けて、旅に出た。（マタイ25：15）

⑩「（前略）妙にバイブルには酒の譬話が多いと思つてゐたら、果せるかなだ、視よ、酒を好む人、と非難されたとバイブルに録されてある。酒を飲む人でなくて、酒を好む人といふんだから、相当な飲み手だったに違ひねえのさ。（後略）」（一三三頁）

(1)人の子が来て、食べたり飲んだりすると、『見ろ、大食漢で大酒飲みだ。徴税人や罪人の仲間だ』という。しかし、知恵の正しさは、その働きが証明する。（マタイ11：19）

(2)人の子が来て、食べたり飲んだりすると、『見ろ、大食漢で大酒飲みだ。徴税人や罪人の仲間だ』という。しかし、知恵の正しさは、知恵の子であるすべての者が証明する。（ルカ7：34）

⑪ただ、その家に生れただけに、僕たちは、永遠に、たとへばユダの身内の者みたいに、恐縮し、謝罪し、はにかんで生きてゐなければならない。（一五二頁）

**「朝」**　**（『新思潮』創刊号・七月）『太宰治全集第八巻』収録**

①「燭台は高きに置け、とバイブルに在るから、高いところがいい。その本箱の上へならどうだらう。」（三九一頁）

(1)また、灯をともして升の下に置く者はいない。燭台の上に置く。そうすれば、家にあるものすべてのものを照らすのである。（マタイ5：15）

(2)また、イエスは言われた。「灯を持って来るのは、升の下や寝台の下に置くためだろうか。燭台の上に置くではないか。（マルコ4：21）

「小志」　（「朝日新聞」七月十七日）『太宰治全集第十巻』収録

①イエスが十字架につけられて、そのとき脱ぎ捨て給たまいし真白な下着は、上から下まで縫い目なしの全部その形のままに織った実にめずらしい衣だったので、兵卒どもはその品の高尚典雅に嘆息をもらしたと聖書に録されてあったけれども、（後略）　（三二一頁）

(1)兵士たちはイエスを十字架につけてから、その服を取り、四つに分け、各自に一つずつ渡るようにした。下着も取ってみたが、それには縫い目がなく、上から下まで一枚織りであった。（ヨハネ19：23）

・一九四八年

「美男子と煙草」　（『日本小説』第二巻第三号）『太宰治全集第九巻』収録

①私は、エホバにだつて誓つて言へます。私は、そのたたかひの為に、自分の持ち物全部を失ひました。　（二三四頁）

②もしこれが後日、何か雑誌にでも掲載された場合、太宰はキザな奴だ、キリスト気取で、あのヨハネ伝の弟子の足を洗つてやる仕草を真似してゐやがる、（後略）　（二四一頁）

(1)（ヨハネ13：5）

『如是我聞』　（『新潮』第四十五巻第三号―第四十五巻第七号）『太宰治全集第十巻』収録

①彼らは言ふのみにて行はぬなり。また重き荷を括りて人の肩にのせ、己は指にて之を動かさんともせず。凡てその所作は人に見られん為にするなり、即ちその経札を幅ひろくし、衣の総を大きくし、饗宴の上席、会堂の上座、市場にての敬礼、また人にラビと呼ばるることを好む。されど汝らはラビの称を受くな。また、導師の称を受くな[a]。／禍害なるかな、偽善なる学者、なんぢらは人の前に天国を閉して、自ら入らず、入らんとする人の入るも許さぬなり[b]。盲目なる手引よ、汝らは蚋を漉し出して駱駝を呑むなり[c]。禍害なるかな、偽善なる学者、外は人に正しく見ゆれども、内は偽善と不法とにて満るなり[d]。禍害なるかな、偽善なる学者、汝らは預言者の墓をたて、義人の碑を飾りて言ふ、「我らもし先祖の時にありしならば、預言者の血を流すことに与せざりしものを」と。かく汝らは預言者を殺しし者の子たるを自ら証す。なんぢら己が先祖の桝目を充たせ。蛇よ、蝮の裔よ、なんぢら争でゲヘナの刑罰を避け得んや[e]。　（三三六頁）

a(1)だから、彼らが言うことは、すべて行い、また守りなさい。しかし、彼らの行いは、見習ってはならない。言うだけで実

行しないからである。彼らは、背負いきれない重荷を括って、人の肩に載せるが、自分ではそれを動かすために指一本貸そうともしない。そのすることは、すべて人に見せるためである。聖句の入った小箱のひもを幅広くしたり、衣の房を長くしたりする。宴会では上座、会堂では城跡に座ることを好み、また広場で挨拶されたり、『先生』と呼ばれることを好む。だが、あなたがたは『先生』と呼ばれてはならない。あなたがたの師は一人だけで、あとは皆きょうだいなのだ。

（マタイ23：3－10）

(2)イエスは教えの中でこう言われた。「律法学者に気を付けなさい。彼らは、正装して歩くことや、広場で挨拶されること、会堂では上席、宴会では上座に座ることを望んでいる。また、やもめの家を食い物にし、見せかけの長い祈りをする。このようなものたちは、人一倍厳しい裁きを受けることになる。」

（マルコ12：38－40）

(3)・あなたがたファリサイ派の人々に災いあれ。あなたがたは、会堂では上席に着くこと、広場では挨拶されることを好んでいる。

（ルカ11：43）

・イエスは言われた。「あなたがた律法の専門家にも災いあれ。あなたがたは、人には背負いきれない重荷を背負わせながら、自分ではその重荷に指一本も触れようとない。

（ルカ11：46）

・民衆が皆聞いているとき、イエスは弟子たちに言われた。「律法学者に注意しなさい。彼らは正装して歩きたがり、また、広場で挨拶されること、会堂では上席、宴会では上座に座ることを好む。また、やもめの家を食い物にし、見せかけの長い祈りをする。このような者たちは、人一倍厳しい裁きを受けることになる。

（ルカ20：45－47）

b(1)律法学者たちとファリサイ派の人々、あなたがた偽善者に災いあれ。あなたがたは、人々の前で天の国を閉ざしている。自分が入らないばかりか、入ろうとする人をも入らせない。

（マタイ23：13－14）

(2)あなたがた律法の専門家にも災いあれ。あなたがたは知識の鍵を取り上げ、自分が入らないばかりか、入ろうとする人々まで妨げてきた。

（ルカ11：52）

c(1)ものの見えない案内人たち、あなたがたは、ぶよは漉して除くが、らくだは呑み込んでいる。

（マタイ23：24）

d(1)（マタイ23：27－28）

(2)（ルカ11：39－40）

e(1)律法学者とファリサイ派の人々、あなたがた偽善者に災いあ

れ。あなたがたは預言者の墓を建てたり、正しい人の記念碑を飾ったりしている。そして、『もし先祖の時代に生きていたなら、預言者の血を流す側には付かなかったであろう』などと言う。こうして、自分が預言者の殺した者たちの子孫だと、自ら証明している。あなたがたも、先祖たちが犯した罪の升目を満たすがよい。蛇よ、毒蛇の子らよ。どうしてあなたがたはゲヘナの裁きを免れることができようか。

（マタイ23：29－33）

(2)あなたがたに災いあれ。あなたがたは、自分の先祖が殺した預言者たちの墓を建てているからだ。だから、あなたがたは先祖の仕業の証人であり、それに同意しているのだ。先祖が殺し、あなたがたが墓を建てているからである。それゆえ、神の知恵もこう言っている、『私たちは預言者や使徒たちを遣わすが、人々はそのうちのある者を殺し、ある者を迫害する。』それで、天地創造の時から流されたすべての預言者の血について、今の時代が責任を問われることになる。

（ルカ11：47－50）

②あの不健康な、と言つていいくらゐの奇妙に空転したブライドの中に君たちが平気でいつも住んでゐるものとしたら、それは或いは、あのイエスに、「汝らは白く塗りたる墓に似たり、外は美しく見ゆれども、云々」と言はれても仕方がないのではないかと思はれる。

（三三七頁）

(1)（マタイ23：27）

③イエスから逃げ、詩から逃げ、たゞの語学の教師と言はれるのも口惜しく、ジヤアナリズムの注文に応じて、何やら「ラビ」を装つてゐる様子だが、君たちが、世の中に多少でも信頼を得てゐる最後の一つのものは何か。知りつゝ、それをわが身の「地位」の保全のために、それとなく利用してゐるのならば、みつともないぞ。

（三三八頁）

④最初に掲げた聖書の言葉にもあつたとほり、禍害なるかな、偽善なる学者、汝らは預言者の墓をたて、義人の碑を飾りて言ふ、「我らもし先祖の時にありしならば、預言者の血を流すことに与せざりしものを」と。

（三四四頁）

(1)（マタイ23：29－30）

⑤彼らは、キリストと言へば、すぐに軽蔑の笑ひに似た苦笑をもらし、なんだ、ヤソか、といふやうな、安堵に似たものを感ずるらしいが、私の苦悩のほとんど全部は、あのイエスといふ人の、「己れを愛するがごとく、汝の隣人を愛せ」といふ難題一つにかゝつてゐると言つてもいいのである。

（三五二頁）

(1)（マタイ19：19・22：39）

(2)（マルコ12：31）
(3)（ルカ10：27）
(4)（ローマ信徒への手紙13：9）
(5)（ガラテヤ信徒への手紙5：14）
(6)（ヤコブの手紙2：8）

**「渡り鳥」**　（『群像』第三巻第四号）『太宰治全集第九巻』収録

①トイレットの中か、または横丁の電柱のかげで酔つてゐながら、残金を一枚二枚と数へて、溜息ついて、思ひ煩ふな空飛ぶ鳥を見よ、なんて力無く呟いてさ、いぢらしいものだよ。
（二七七頁）

(1)（マタイ6：25－26）
(2)（ルカ12：22－27）

②しかし、また、敵を愛すべし。
（二二五頁）

(1)（マタイ5：44－48）
(2)（ルカ6：27－36）

**『桜桃』**　（『世界』第二十九号・五月）『太宰治全集第九巻』収録

①われ、山にむかひて、目を挙ぐ。／――詩編、第百二十一。
（二二五頁）

(1)（詩編121：1）

**『人間失格』**　（『展望』第三十号・六月―第三十二号・八月）『太宰治全集第九巻』収録

①なんだ、人間への不信を言つてゐるのか？　へえ？　お前はいつクリスチャンになつたんだい、と嘲笑する人も或いはあるかも知れませんが、（中略）現にその嘲笑する人をも含めて、人間は、お互ひの不信の中で、エホバも何も念頭におかず、平気で生きてゐるではありませんか。
（三一四頁）

②（前略）誰にも訴へなかつたのは、人間への不信からではなく、また勿論クリスト主義のためでもなく、人間が、葉蔵といふ自分に対して信用の殻を固く閉ざしてゐたからだつたと思ひます。
（三一五頁）

③（前略）肉親と他人、故郷と他郷、そこには抜くべからざる演技の難易度の差が、どのやうな天才にとつても、たとひ神の子イエスにとつても、存在してゐるものなのではないでせうか。
（三一六頁）

(1)こうして、人々はイエスにつまずいた。イエスは、「預言者が敬われないのは、その故郷、家族の間だけである」と言い、人々の不信仰のゆえに、そこではあまり奇跡をなさらなかった。
（マタイ13：57－58）

(2)イエスは彼らに言われた。「預言者が敬われないのは、自分の

故郷、親族、家族の間だけである。」そこでは、ごく僅かの病人に手を置いて癒されたほかは、何も奇蹟を行うことがおできにならなかった。（マルコ6：45）

(3)そして、言われた。「よく言っておく。預言者は、自分の故郷では歓迎されない者だ。（ルカ4：24）

④自分には、その白痴か狂人の淫売婦たちに、マリヤの円光を現実に見た夜もあつたのです。（三三二―三三三頁）

⑤自分は神にさへ、おびえてゐました。神の愛は信ぜられず、神の罰だけを信じてゐるのでした。信仰。それは、ただ神の笞を受けるために、うなだれて審判の台に向ふ事のやうな気がしてゐるのでした。地獄は信ぜられても、天国の存在は、どうしても信ぜられなかつたのです。（三七一頁）

⑥「（前略）罪のアントがわかれば、罪の実体もつかめるやうな気がするんだけど、……神、……救ひ、……愛、……光、……しかし、神にはサタンといふアントがあるし、救ひのアントは苦悩だらうし、愛には憎しみ、光には闇といふアントがあり、善には悪、罪と祈り、罪と悔い、罪と告白、罪と、……嗚呼、みんなシノニムだ、罪の対語は何だ。」（三九五頁）

〔使用テクスト〕

- 讃美歌委員会編『讃美歌　第一篇』（警醒社・一九〇三年）
- 『太宰治全集』（全十二巻＋別巻・筑摩書房・一九八九―一九九二年）
- 日本聖書協会『聖書　聖書協会共同訳―旧約聖書続編付き』（日本聖書協会・二〇一八年）